

42611

教科書文庫

4

810

51-1929

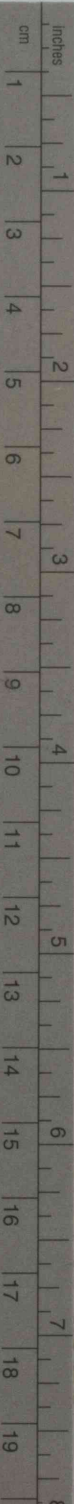
20000
64445

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

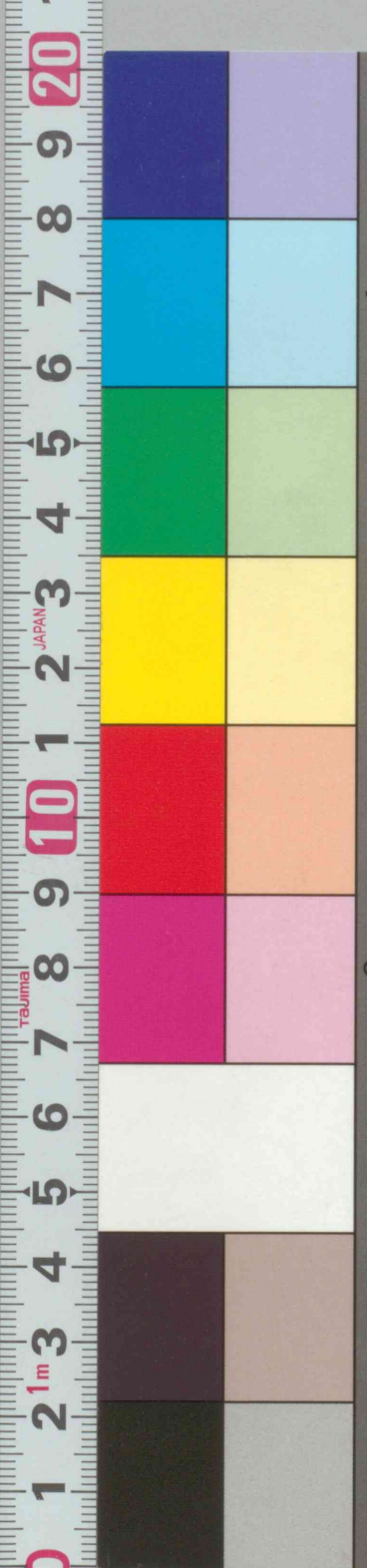
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



八波則吉編

現代文藝新選

二卷



東京開成館藏版



資 料 室

教科書文庫
4
810
51-1929
2000064445

3959

Ya 20

文部省檢定濟

昭和四年二月十三日 師範學校・中學校・高等女學校國語科用

八波則吉編

現代文學新選

株式會社 東京開成館藏版

広島大学図書

200064445



平福百穂裝幀



文藝叢書
昭和二十二年三月 東京 中央書局發行

松本武久

野矢三郎

八尋

目次

一 野矢三郎の生涯
二 野矢三郎の著作
三 野矢三郎の著書目録
四 野矢三郎の著書目録
五 野矢三郎の著書目録
六 野矢三郎の著書目録
七 野矢三郎の著書目録
八 野矢三郎の著書目録
九 野矢三郎の著書目録
十 野矢三郎の著書目録

一	波の上	徳富健次郎	一
二	縮むものゝ力	相馬御風	二
三	春の丘(詩)	川路柳虹	三〇
四	巨人アムンゼン	太田正孝	三三
五	平原と高原	吉江喬松	三三
六	夏の歌		三六
七	山陰の旅	島崎藤村	四〇
八	小曲(詩)	河井醉茗	四五
九	だるま(脚本)	武者小路實篤	五〇
一〇	水郷風俗	土岐善麿	五六

一一	柱	正水不如丘	六一
一二	溪を思ふ	若山牧水	六六
一三	鯉よ(詩)	千家元麿	一〇八
一四	平泉の廢都	田山花袋	一一二
一五	塙保己一	本山裝舟	一一三
一六	淨世床小景	久保田万太郎	一一三
一七	叡山	夏目漱石	一二三
一八	本	百田宗治	一二七
一九	百舌の子	志賀直哉	一三三

現代文學新選 卷二

ト レ プ

睨み合つた瞬間……………	(二六一—二七)
夏のハが殺……………	(四〇—四二)
オランダ所見……………	(八〇—八二)
柱の不思議……………	(九四—九五)
平泉所々……………	(三二—三三)

徳富健次郎

熊本縣の人、

文學者、昭和

二年歿、年六

十

熊次と駒子

作者夫妻のこ

元年生

徳富健次郎

三月の麗かな日、熊次と駒子は熊本の停車場から汽車で松橋まつはしに往き、そこから更に葦北行の小蒸氣に乗つた。

(1)

かうして二人で出掛けるのは、熊次にとつては珍しい旅行であつた。葦北の海邊に生れ、それに十八の年まではそこに祖父が住んでゐたので、熊次は或は父母と、或は父と、或はたゞ一人で、この海を或は小舟で、或は小蒸氣で何遍往來したか知れぬ。その海に駒子を伴ふことは、熊次には大抵の満足ではな

上の波

むつごろ
はぜ(蒸)の一
種、正しくは
むつごらうと
いふ
そだ
粟のまぐさ

かつた。

干潟の泥にむつごろのびんく、飛び、石垣に船蟲や蝨はまの赤い小蟹の數限りもなく這ひ歩く松橋の港を離れて、宇土半島が右に、八代の築堤が左に追々開いて行くと、そだ、笹などを立て



徳富健次郎

た浅い水は次第に深く海らしくなつて、二里に一町、一里に一村、點々と人家の見える半島の岸近く沿うて、船は西へ駛つた。長閑かな午後である。

(2)

上の波

肥後
熊次の姓

姉の住んでゐる郡浦ぐんらのうらの邊に來ると、熊次は上等室に横になつてゐる駒子を呼んで指さし示した。南向きの殊に暖いこゝらの海邊の山畑に、秋は朱藥あまが黄色に、夏は甘蔗かんざが一面青々と茂つた。姉の家でも砂糖を搾つた。肥後一家が熊本に住ん

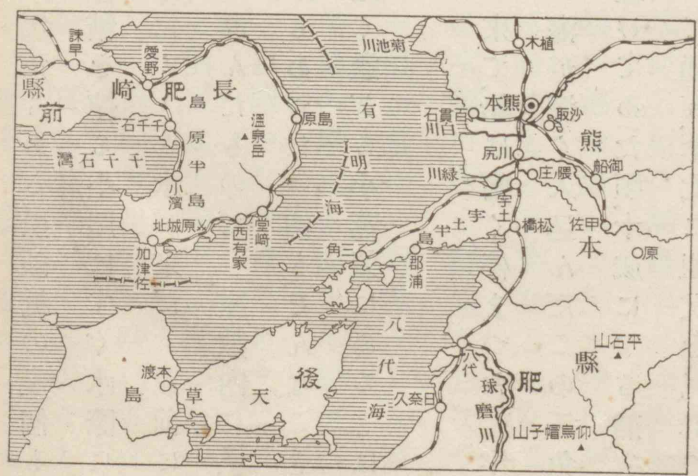
であつた頃は、年々初冬になると、二尺角もある黒砂糖の幾個もが郡浦から届けられた。その砂糖を搾る小屋はすぐ水際にあつて、潮が満ちると石段までひた／＼と水が來た。以前に一夏その家にあつた時、よくこゝで涼んだものだ。屋敷内には、水のやうな水の涌く大きな井戸もあつた。姉も、そんなことを思ふ熊次が駒子と、その前近く過ぎる小蒸氣にゐるとは思つてゐないであらう。

郡浦から島に沿うて三角みづがしの港に來て、船は暫く停まつた。宇土半島の突端と天草島との間に海が深く入込んだこの三角の瀬戸は、西郷南洲がまだ戦を續けてゐた頃、十歳になる熊次が父母と三百石積の和船に乗つて通り、葦北に祖父を見舞つて以來、色々思出の多い場所であつた。まだ海水の鹹かさを

上の波

(3)

らなかつた熊次が、船の窓から柄杓で青みきつた水を汲んで、一口渴を醫しようとして、思ひがけない鹹さに噎せかへつたのも、この瀬戸の入口であつた。駒子にも、高等小學校時代に父に連れられて、こゝに海水浴に來た記憶があつた。或年の夏、東京からの歸省に、九州線が洪水で不通になり、長崎廻りの船で兄とこの三角に上陸したこともあつた。その頃は三角からの汽車はなく、車で熊本に歸



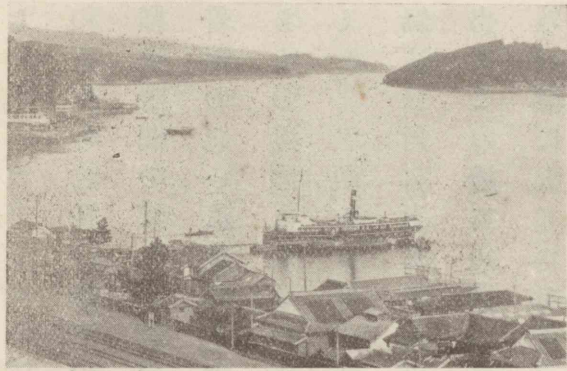
(4) 上の波

行きまっしゅうたい、あゝ
た
行きませう、
あなた

つた。車代が八里で六十錢、それで、「行きまっしゅうたい、あゝ」といつた老車夫の國訛が駒子には忘れられなかつた。和服姿の船長が船室の入口に顔を出して、「日奈久上りのお客様は、時間の都合で解でお送りします」といふ挨拶をした。船着きの悪い葦北の海、港の上り下りは何處でも解を使ふ。「こちらの迷惑になるやうにはすまいな」と、熊次が念を押すと、「ええ、ええ」と頭をさげて、船長はおりて行つた。船は三角を出た。八年前の夏、兄の催しで、二三人の人達と小舟でこの邊に魚釣に來た記憶を喚起しながら、熊次は船室の外、欄にもたれて、過ぎ行く島々、ゆらめく碧緑の水の美しさを眺めた。この頃頻りに繪心の動く熊次は、手帳を出して下手なスケッチをはじめた。駒子は相變らず船室に寝てゐた

(5) 上の波

目測
目でおおよそ
に測ること



三 角 港

船は島々の間を駛り抜けて、一面鉛色の鏡をのべた内海に出た。そして、天草寄りに小一時間も駛ると、ぴたりと停まつた。先刻の船長が顔を出した。「こゝでおりていたゞきたい。」鉛筆を持つたまゝ、熊次は見廻した。すると、そこは内海の真中で、日奈久の山々は遙か左手に、目測三里もの彼方に見えた。熊次はむつとした。「こんな處でおろす法があるか。」船長は引下つた。船はまた進行をはじめた。十分と経たぬのに、船がまた停まつた。三角から曳いて來たらしい小舟

依然として
もとのまゝに

が左舷に漕ぎ寄せられた。船は先刻からいくらも駛つてゐない。日奈久は依然として遠い。日はもう天草の島山に沈まうとしてゐる。熊次はむつとした。少しばかり駛つてすぐとめる。子供だましの仕打が氣に喰はぬ。熊次は語氣荒く船長をきめつけた。客に失禮だ。病人も連れてゐる。船長も赤黒い顔色を變へた。だから三角でお断りした。時間がおくれて他のお客様が御迷惑なので、わざ／＼會社の費用で三角から舟を曳いて來てゐる。せき込む船長の言葉は段々ぞんざいな下司口になつた。春季休暇の歸省か旅行でもするらしい學生が大勢甲板に陣どつてゐた。海の真中での時ならぬ口論に、その連中が眞黒にたかつて傾聴してゐた。

下司口
下等な品のな
い物いひ

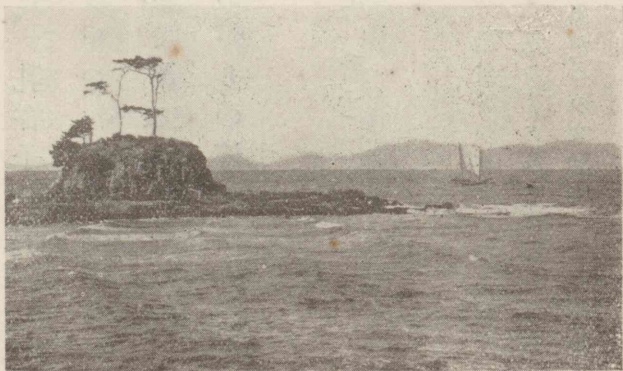
胡亂に
あやしく

熊次は負けてをれなくなつた。「君の名は何といふ。会社に話す。きつと船長の顔を見て、熊次は手帳と鉛筆とを取直した。船長が少したじくした。答が胡亂になつた。學生達がどつと笑ふ。そこに洋服の船員が出て來た。そして、仲に這入つた。熊次ももう折れ時だと思つた。「では、君が船長に代つてあやまるんだね。はい、お詫びします。それならいゝ。皆さんの御迷惑もある。艇に移らう。船室にはらくしてゐた駒子を扶けて、熊次は鞆諸共に艇に移つた。高い金を出してゐるんだ」と、件の洋服船員が聲高に上から呟いた。船はすぐ南へ進行しはじめた。小舟も帆をあげて、東へ日奈久を指した。見る／＼天草の島山に紅い日は落ちた。白く光る海のあなたに、汽船はもう玩具の船ほどに小さくなつた。

カンテラ

もと和蘭語から出た語、あかりをともしもの

そして、その帆綱の上には三日月がぼんやり出てゐるのも見えた。海は暮れて、月が傾きながらも、空はやや明るかつた。あるかないかの風を帆に受けて、舟は波の上をびたりぷたりと、いつまでもたゞ坐つてゐるかのやう。向ふに日奈久の灯は點々と見えて、もう按摩の笛が聞えるやうになつても、舟はなかく／＼そこに着かなかつた。



八代附近の海

たうとう帆が櫓になつて、舟は埠頭内に入つた。そして築港工事中の足場の悪い邊に着いた。カンテラ一つついてゐな

平に
ひたすら

い薄暗い中を、熊次は駒子を負つて、ざら／＼した盛土の崖を
迂り／＼上つた。鞆を持つてついて来る船頭に案内させて、
或宿に着いた。主人は留守であつた。乳呑子を抱いた若い
おかみさんは、夜中の來客を歓迎しなかつた。「作事ではあ
り、賄などは出來まつせえん」と、長崎辯で斷るのであつた。熊
次はまたむつとした。しかし、病氣あがりの連れの手前、平に
頼み入るより外はなかつた。
とにかく、新建の奥座敷に案内された。(富士)

なだらかなゆつたりした書きぶりである。船員との言ひあひも、事が
らはとにかくとして、たゞ面白く讀まれる。見る／＼移つて行く風景
の美しさに織りまぜた若い頃の楽しい思出が、この文章に一段の輝き
を添へてゐる。夕方の海を敘したところは殊にこの作者得意の筆で

あつて、簡単な筆づかひのうちにいふにいふはれぬ趣がある。

相馬御風

名は昌治、新
潟縣の人、文
學者、明治十
六年生

石川啄木

名は一、岩手
縣の人、歌人、
明治四十五年
歿、年二十七

二 縮むものゝ力

石川啄木の歌に、

一晩に咲かせて見んと、梅の鉢を火にあぶりしが

咲かざりしかな

といふのがある。私はこの歌を時々思ひ出して口ずさむが、
その度に、私はまづこの一首に籠つた作者の皮肉な心持に、一
種の軽い苦笑を誘はれる。しかし、その苦笑感は忽ちにして
作者その人に對する痛ましき感じに變つて、私をして深い
憂鬱にさへも陥らせることがある。

「何といふ痛ましい焦躁であらう。」

憂鬱

氣がふさいで
元氣のないこ
と

焦躁

心のあせつて
落付かぬこと

かう私の心が叫ぶと同時に、私は啄木のあの晩年の生活を思ひやらずにはゐられない。花は咲くべき時に到らなければ、決して咲かない。咲くべき内部の力が充實しきつた瞬間に達しなければ、花は決して咲きはしない。それを火にあぶつ



相馬御風

てまでも無理に咲かせようとして、あせり狂つてゐるそのいらだたしい心、悩ましい心がまたとあらうか。それについて思ひ出されるのは、嘗て

私が長い北國の冬ごもりのわびしさの中にあつた時のことである。忘れもしない、鉢植にして置いた雛菊の花のたゞ一輪咲くのを見たばかりで、限りなく大きな歡びを與へられたことがある。私はその時の經驗について、當時次のやうなこ

とを何かに書きつけたと記憶する。

部屋、温。

日光

内部—力(生命)

ほんのりと雪明りのさしてゐる窓際の臺の上に置いた鉢植の雛菊が、漸く一輪だけ咲いた。いかにも柔かさうな緑の葉の間から、二寸ほどの莖を眞直に伸ばして、その上に白い小さな花が小首をかしげながら咲いてゐる。僅にこの小さな一鉢の春の草を眺めてゐるだけでも、私にとつては測り知ることの出来ない歡びがある。花は無論部屋のぬくみがあればこそ咲いたのだ。しかし、またそれは單にぬくみだけで咲いたのではない。曇硝子を透して來る光線もそれにあづかつてゐる。けれども、花はやはり花それ自らの生命の力の充實を待つて、はじめて咲いたのだ。外からの力がいかに加はつても、内にある生命の充實を得なけ

れば花は咲かない。花の咲くその最後の瞬間の生命の充實——それを私ははじめてしみたくと見入ることが出来た。僅に一つの小さな鉢に植ゑられたこのさゝやかな生命のあるものゝ働によつて、私の書齋全體がいかに活気づけられたことか。

「花が咲いた！ 花が咲いた！」

子供達までがこの小さな一輪の花の咲いたことによつて、

躍り出さんばかりの歡びを與へられたのである。

私はかうしたその時の私の心持と、前に掲げた啄木の歌に籠められた悲痛な心持とを比べて、今更のやうに深く考へさせられるのである。

「縮むものに弾力あり！」 私達はよくさうした言葉を耳にす

心眼云々
さとう賢い心
はよくすべて
を正しく見と
ほして知りう
るからいふ

る。そして、それによつて、いつも深く自ら警められてゐるの
を覚える。だが、これを儼然たる一個の事實として私の心眼
に見せたのは、實に前述の私の經驗であつた。

強く結んだ小さな花の蕾の内に籠められた偉大な生命の力、
——それを感じさせられたあの瞬間の私の感激は、全く何と
いつて見やうもなく尊いものであつた。外に向つて花と開
く力は、實に内に向つて貯へられ、籠められるだけ籠められた
力の極致である。堅い地面を破つて、小さな種が芽を吹き出
すのや、厚い殻を破つて卵の中から雛の生れ出るのや、いづれ
もこれ決して外に出ようとばかりあせり立つ結果ではなく
て、内に籠れるだけ籠つた力のおのづからな爆發に因るので
ある。縮めるだけ縮んだものゝ内に充實しきつた力こそ、こ

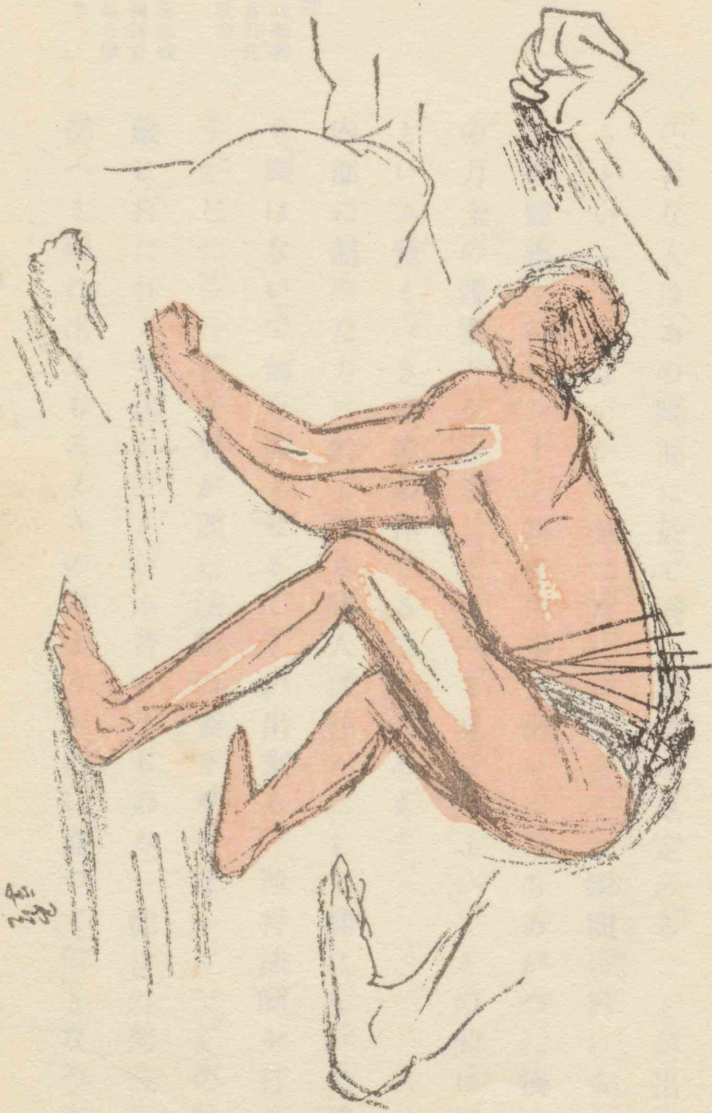
極致
この上なくよ
いとところ、最
上のところ

精神的 内容の充實
 経済的 世にあつての最も偉大な力ではないか。そんなことを私は同時に考へさせられたのであつた。

肉体的

以前から私は角力を見ることが好きであつた。しかし、角力を見てゐて私の最も壯快に感ずるのは、二個の人物の闘つてゐる状態や、また勝負の如何よりも、二人の力士が互に睨み合つたあの瞬間の緊張味である。土俵の真中で、二人の力士の睨み合つた瞬間に於けるあの肉體ほど美しいものを私は未だ曾て他に見たことがない。ふだん見ると馬鹿々々しいまでに大きなぶうたいの持主であるその人も、あの瞬間に於てだけは、少しも大きいといふ感じを與へない。縮めるだけ縮んでゐる。肉體のあらゆる部分に力が充實して、すべての筋骨が緊縮されるだけ緊縮してゐる。恐らくあの瞬間に於て

緊張味
 力がこもつて
 氣のはりつめ
 たぐあひ



(筆ハ荻村水) 闘舞たつ合み腕



西行法師の闘ひ

は、彼等の肉體は強弓の矢をでも撥ね返すであらう。石を投げつけても傷つかないであらう。だからこそ、角力を見るに巧者な人は、あの瞬間に於て既に勝負を見定めることが出来るといふではないか。試に互に睨み合つた瞬間に於ける力士の體軀と、「待つた！」と叫んで手を引いて立ちあがつた瞬間の力士の體軀とを、注意して比べて見るがよい。その間に、何といふ驚くべき相違の存することであらう。

内部に籠つた力に於て勝る時、人は往々にして闘はないで勝ち、闘はないで他を服させることが出来る。西行法師を打たうとした荒行者文覺が西行法師の姿を見たばかりで、その尊嚴に打たれて平伏したといふ昔の話もある。徒に外部へ外部へと現れ出るもろくの力よりも、内に籠つて「信」となつた

西行法師

俗名は佐藤義清、鎌倉時代初期の歌僧

文覺

俗名は遠藤盛遠、源頼朝を助けて兵を擧げさせた

濫費
むだづかひ

力のいかに偉大であるかについては、昔からさまざまな話が
残つてゐる。私達はそこにも、よく縮むもの、弾力の強さを
認め得るのである。

しかし、今日の社會を見渡す時、私達は多くの人々が徒に外部
への力の濫費をしつゝあるのを見る。かの啄木の歌のやう
に、まだ咲くだけの力が充實してゐない花の蕾を、火にあぶつ
てまでも咲かせようとしてゐるやうな焦躁に、餘りに多くの
人々が煩はされすぎてゐる。安價な力の表現のいかに多す
ぎることよ。

生活の費用を節約すること

この意味に於て、私達は現代に向つて、經濟上の緊縮以上に、肉
體上のまた精神上の力の緊縮の必要なことを叫びたい。よ
く縮むもの、強い弾力、それが今の社會には甚だ乏しい。

表現
そこにあらは
し出すこと

角力でいふならば、睨み合ひが十分でない、ろくに睨み合はな
いうちに、いゝ加減に角力をとつてゐるやうな人が餘りに多
い。力を外へ働かせることにはばかりあせつてゐて、内に力を
充實させることを忘れてゐる。根強い働がなく、奥深い思考
がない所以である。つまり底力のある人や、底力のある働に
乏しいのである。その底力のないといふことは、内に籠つた
力がないといふことである、眞の緊縮と充實とがないといふ
ことである。私達はよく子供の頃腕を絲で縛つて、その絲が
力瘤を入れることによつて切れるか切れないかを試したも
のである。内に充ちた力が外に現れる力よりも強いことは、
そんな例によつても分る。

「縮むものに弾力あり」といふ一語は、現代人、殊に現代の若い人

人にとつては、最も意義ある金言ではあるまいか。緊縮しきつた力の充實しきつた筋肉は強い矢をさへも撥ね返す。よく縮むことによつてよい充實を得たところにこそ、おのづからなる眞活動がはじめられるのである。(静と動との間)

出来るだけ言ひまはしを入念にして、飽くまで人に分らせようといふやり方である。しかも、その間に少しも無駄がない。最初に引いた歌から導かれて花を思ひ蓄を思つて、そして文章の主題に移つて行つた。そのために、後の角力のことでも西行のことでも、皆非常に意味の深いものになつてゐる。

≡ 春の丘

川路柳虹

丘に立ち、

川路柳虹
名は誠、東京の人、詩人、明治二十一年生

潮騒

潮のさしてくる時に波のさわぎたつこと

聞くは潮騒、

とほうみの

晝の潮の音、

丘に立ち、

見るは濱茄、

色あをき

春の若葉を。

濱茄
いばら科の灌木、紅または白の花をつける

丘に立ち、

嗅ぐは若草、

ふるさとの

廣野のほひ。(蘆の笛)

各齣のはじめの句を同じくしたので、この詩が一層おとなしいしんみりしたものになつてゐる。懐かしいしらべのうちに、自然に若々しくのびやかな感じが溢れてゐる。

太田正孝

静岡縣の人、
經濟學博士、
明治十九年生

四 巨人アムンゼン

太田正孝

今日
昭和二年をい
ふ
精進
つとめはげむ

アムンゼン^{Amundsen}は兩極征服の勇士である。彼は地球の未知境である兩極を探検するの目的を遂げるために、まだ年端もゆかぬ二十歳の時から五十五歳の今日に到るまで、三十有餘年の間を一貫不斷に精進^{しんじん}して來た。彼は探検のために勉學した。彼は探検のために修養した。彼は探検のために心身を鍛鍊した。そして、あつぱれ一個の大きな人格を完成したのであ

東郷大將
名は平八郎、
鹿兒島縣の人
元帥、伯爵
アムンゼンの修養
と人格



孝正田太

る。彼がわが國の東郷大將に比較せられるほど偉大なのは、その仕遂げた事業の立派なものによることは勿論であるが、それと同時に、何となく神々しいとまでに思はれる人格の美しさからではなからうか。三十有餘年の永きに互つて探検生活^{ノルウェー}を續けさせた祖國の諾威人^{Norway}と諾威政府との後援は、彼の人格を飽くまでも信頼しきつたからのことであらう。信頼するに足らぬ人間に向つて、何で

仕事のスリット

アムンゼンは一八九二年頃から、早くも北極の空にあこがれ

てゐた。「北極へ行つて見たい、地球の未知境を究めてみたい。」それが彼の唯一の希望であり光明であり憧憬であつた。彼は父母の望によつて醫學を修めることになつたが、二十歳の



アムゼン

船に乗込んでみた。また北氷洋の探検船に乗つて、數年の間、新しい航路の發見に力を入れてもみた。かうしてゐる間に、早くも北極探検家として一かどの名をなし、學問上その他

聲を聞くと共に、彼の湧き立つ血汐は最早彼を學窓の内
にぢつとさせてはおかなかつた。彼は學校を捨てた。
海へ出た。そして、氷山の流
れ來る北氷洋で、鯨を追ふ漁

いろ／＼の方面に少からぬ貢獻をなしたのである。しかし、彼自身はそれで満足はしなかつた。どうしても早く北極へ行つてみたいと思つた。遂に彼は義捐金を募つた。政府の補助金も要求した。幸に彼の人格と岩をも徹す決心によつて、それがうまく運んでいつた。

所が、一九一一年になつて、彼は何人にも相談せず、黙つて南極探検に出掛けてしまつた。世間は騒い^ど責めた。裏切者！
詐欺師！
不徳漢！
彼はあらゆる罵詈誾^の誹謗を浴びせかけられた。けれども、一言の辯解もしなかつた。そして、たゞ黙^たとして一路南極へ向つたのであつた。

その年はいはゞ「南極探検年」とでもいふべきであつた。アム

スコット
英國人、探検
家
白瀬中尉
名は轟、秋田
縣の人、探検
家
ホエールズ灣
南極圏内にあ
るロス海の東
端に近い灣、
一九〇八年に
英國人シムク
ルトンが命名
したのである

ンゼンが行つた、スコットが行つた、またわが國の白瀬中尉が行つた。世界の人人々の視聽は期せずして南極に集つた。その中で、アムンゼンはホエールズ灣McMurdoから四十九日目に苦もななく南極に到達して、諾威の國旗を立て、しまつた。そして、その歸途に、ホエールズ灣で白瀬中尉の探検隊一行の乗込んである開南丸に出つくはしたのであつた。

アムンゼンは南極探検の成功によつて、今までの非難攻撃をいくらか薄くすることが出来た。けれども、急に豫定を變



アムンゼン南極に着く

更して、改めて南極に赴いた心の内を理解し得ない人々は、なほも彼の遣り口に疑を抱いて、攻撃の手を弛めなかつた。それでも、アムンゼンはやつぱり辯解がましいことを口にしなかつた。彼は、身に恥ぢることがなければ、天下何物も恐れるに足りないといつた態度であつた。

一九二五年五月二十一日午後五時十五分、アムンゼンの乗込んである飛行機は北極へ向つて飛びあがつた。これに續いて、仲間の乗つてゐる他の一機も出發した。アムンゼンはその名著「わが極地飛行」に、飛行機がいよいよ北へと針路を取つた時の感想を述べて、その瞬間に、自分の胸の中に浮んで來たものはたゞ感謝の念ばかりであつた。といつてゐる。そして、

——この飛行の成敗如何はとにかくとして、自分がかうして北極探検飛行を實行することは、これまで自分が受けた一切の疑惑と誹謗とを一掃してくれるに違ない。自分は重荷をおろしたやうな感じがする。それにしても、今かうして自分を北極に行くことの出来るやうにしてくれたのは、實に自分と一緒に居てくれる五人の人達のお蔭である。自分は深くこの人々に感謝しなければならぬ。——といふことを、いかにも情の溢れた言葉で書いてある。彼が仲間に対するこの感謝の心は、彼の面目（大體、名譽、信譽）そのものであるといはれよう。アムンゼンはいふ、自分がいろ／＼の誹謗を受けてゐる間にも、自分の仲間達は決して自分を疑ひはしなかつた。その信頼を受けたことは、自分の最も感謝しなければならぬことである。

賣名的野心
むやみに評判
をよくしよう
といふつまら
ぬ下心

ある」と。彼の同行者はすっかり彼を尊敬した、信じて疑はなかつた。彼等は決して普通一般の探検家や冒険家にならぬ、あつた。ちな賣名的野心を満足させようとして、アムンゼンについて行つたのではない。アムンゼンの北極にあこがれる心をよく理解し、探検家としての體驗と實力とに信頼し、眞面目に眞剣に興味と誠意とを以て行を共にしたのである。彼等がいかに着實で眞面目な人達であつたかは、彼等の文章を通じても窺ひ知ることが出来る。

アムンゼン一行を乗せた二臺の飛行機が北の空に姿を隠してしまつてから、早ければその翌日、遅くも三日の後には北極征服の快報に接するであらうと、世界の人々は待ちに待つて

ゐた。所が、出發してから五日目になつても何の報知もない。そのうちに十日過ぎた。二週間目になつてもまだ何の知らせも来ない。やがて六月十五日になつた。それでもやつはり、一向に便りが無い。かうなつては、世界の人々は六名が遭難したと信ぜずにはゐられなかつた、勇敢な死を思はずにはゐられなかつた。

さう思つてゐた矢先に、彼等は生きて還つて來た。一臺の飛行機に六名が乗込んで飛んで來た。一緒に出掛けた他の一臺はたうとう歸つて來なかつた。故障によつて極地に見捨てられてしまつたのである。

聞くところによれば、二機は北極に近い氷原に着陸ならぬ着氷を餘儀なくされたのであつた。それが再び飛びあがるのには滑走場が必要であつた。その滑走場を作るために、六名は非常な苦心をしなければならなかつた。それやこれやで、時日はどん／＼経過した。食糧は減る。寒氣は強い。滑走場はいつ出來あがるか見込もつかなかつた。かやうな時にも、アムンゼンはちやんと五名の一日の仕事の量を計算して、幾日の後にそれが出來あがるかを勘定してゐた。そして、それに對して食ひ延ばさねばならぬ食糧制限（限もつとむ切もつとく）もちやんと言渡した。五名の仲間はアムンゼンにいはれるまゝ、指圖されるまゝに行動して、運命をアムンゼンの手に任せた。彼等はアムンゼンと共にあることによつて何等の不安も感じなかつたのである。アムンゼンは、秋の日に庭の中で枯枝を拾ひ集めてゐるやうな心持で、氷を削つてゐる。彼はその身の極地

僥倖
まぐれざいは
ひ、理由もな
いのふとや
つてきた仕合
せ

昨年
大正十五年

にあることを知らないもの、やうである。彼は、私達が今非
常な危地に陥つてゐることを感じてゐないやうである。私
達は彼のこの平和な素振を見て、何となく安全な境地にゐる
と信ぜずにはゐられなかつた。とは、一行中の或人の言である。
彼等はたうとう生還した。世界の人々は、地獄から死んだ人
でも歸つて來たかのやうに驚いた。この世界の人々の驚異
に對しても、アムンゼンは、これは僥倖ではない。自分は固く
僥倖でないことを信ずる。自分はなすべきことをなしたの
に過ぎない。といつてゐる。彼は飽くまでも、健康と規律とが
保持される限り、人間に不可能といふことはない。と確信して
ゐる。そして、彼は事實に於て、その言葉の眞であることを自
らの行動によつて示したのである。そのあくる年、即ち昨年、

彼は首尾よく北極横斷の大業を成し遂げたのである。(現代)

文章がしつかりしてゐる。それでゐながら、十分にやさしくしとやか
で何の窮屈さも感じさせない。一篇の書き出しもよい、アムンゼンの
言葉を引いたのもよい。少しもわざとらしいところがないだけでも、
この文章はすぐれたものである。

五 平原と高原

よりんちるね

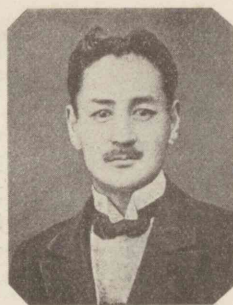
往古富士山が盛に活動してゐた頃、その降灰が二丈も厚く積
つて、一望灰色の野を現出した。それが武藏野ばかりではな
く、關東平野一帯に及んだのであるが、そこに何處からともな
く木の實や草の實が風に運ばれて飛んで來て、やがて雜草が
生じ、樹木が生じた。月影が草に入る廣漠無限の武藏野は實

吉江喬松
長野縣の人、
文學者、明治
十三年生

絹篩
絹布で底を張
った篩

にその灰の上に造られたのである。

このことは東京市中を歩けばすぐ分る。郊外へ出れば一層よく分る。それは上の降灰と下の土壤とが混じて多くの年月を経過したにも拘らず、絹篩きんふるひにかけてもその目から漏れさ



吉 江 喬 松

うな小さい砂塵が一带に連なつてゐることである。でも、郊外ならばこの砂塵の舞ひあがるのを防ぐために、幾重にも入りまじつた草の根があり、樹

アスファルト
砂・石灰石な
どを煉り合せ
た黒褐色のも
の

木の押へがある。しかし、市中に入ればそんな自然物の押へがないから、砂塵の上にアスファルトasphaltを敷き煉瓦を敷いて道路を造つても、日々幾萬といふ人の足は、そのアスファルトや煉瓦を幾分かづつ破るので、細かな砂塵はまたその中から隙

間を求めて舞ひあがる。ましてアスファルトも煉瓦も敷いてない路面は、雨が降れば砂塵がどろどろに溶けて流れ、日が照り風が吹けば舞ひあがつて、人家でも庭園でも街頭の樹木でも、路上を走る自動車でも電車でも荷車でも、埃まぶれにせずにはおかない。

砂塵は少しの風にも舞ひあがる。雨が霽れて日が少し照れば、すぐ小さな龍巻が街頭のそこそこセウキに出来て、人の歩いてゐる前をくるくると廻つて、ちやうど小さな人魂セウキが轉んで行くやうに、先へ水柱と消えて行く。日の光が一層強くなればなるほど、この龍巻も大きくなる。かうして、昔の灰の野原の廣漠たる景色を現出せずにはおかないのである。武藏野の夏に於て最も目に立つのは、この砂塵の舞ひあがる

濛々として
うす暗く、あ
たりがぼんや
りとなるやう
に

ヴェール
顔などをおほ
ふ薄いきれ、
こゝでは譬へ
ていつたので
ある

ことである。若芽が木々に萌え出る頃、晩春から初夏にかけて、西北の風が山から野を横切つて海へと烈しく吹き渡る。武藏野の中の砂地といふ砂地の地皮を盡く引剥ぐやうにして、砂塵は濛々として天地を掩ひ盡す。樹木も叢も村落も、皆この砂塵を浴びせられて灰色になる。原始的の野の姿は、初夏の武藏野に於て最もよく見られる。

武藏野では、白樫の林でも檜の林でも、樺の林でも、その若葉の緑は皆この砂塵の薄いヴェールをかぶせられる。そして、一切の緑の光は消されてしまふ。爽かな緑色の感じ、うつとりとした緑の與へる心持、水のやうに流れる緑の氣分、晴れ渡つた夏空の下に燃え立つやうに壮大な姿を見せる緑の大塊大地思はず眼を見張り胸を叩いて吐息

をして見たいやうな緑の野、それは高原の夏に於て求められる特色である。武藏野の緑は根を張り枝を伸ばして一所懸命に砂塵を押しつけてゐるが、それでも力が足りないで、砂塵はそれを撥ね返して舞ひあがつて来る。

平原の緑には、明るく軽く、ぢつと吸込まれて行くやうな深みがない。今にも何物かに吹き消され拭ひ取られてしまひさうな心もとなさがある。

武藏野の雨期ぐらゐ鬱陶しい厭な感じを起させるものはない。灰色の雲が一面に空を掩ひ、その雲の下層だけが少しづつほつれ崩れて、しとくと雨になる。その雨はいつ止む様子もない。空の雲全體が下からく皆解けて流れてしまふまでは、雨の止む氣色は見えない。武藏野では、爽かな夏景色

雨期
梅雨の頃をい
つたのである

いぶせく
いやな氣持で

を味はふべき一ヶ月間は、かうして、雨の中でいぶせく送らね

ばならない。



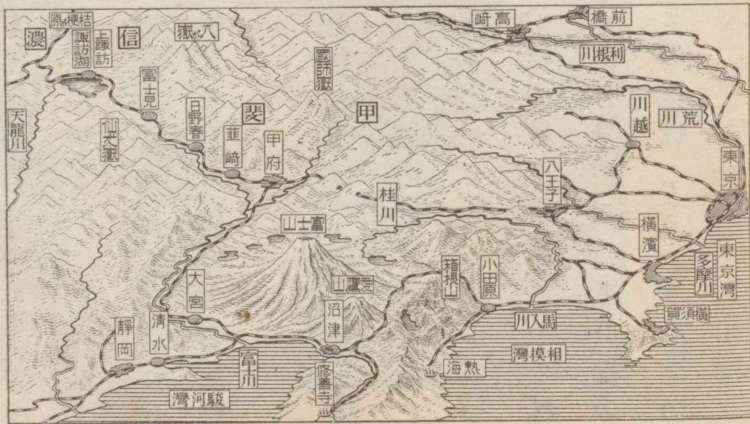
八が嶽の裾野

私は高原地の雨期がいかにも烈しくも、またいかに短くも過ぎ去るか、その有様を今こゝで述べようとは思はないが、たゞ山國に降り注ぐ雨のいかにもさつぱりとして、別に戸内に濕氣を送り入れて室内の器具に黴を生えさせるやうなこともなく、さら／＼と

青葉の上に落ちて、忽ち過ぎ去つてしまふといふことだけをいつておけば十分である。

八王子
東京府、中央
線に沿つてゐる

誰でも武蔵野の平原を汽車で駛つて、八王子以西の隧道を經過し、桂川の谿谷に白百合の花の點々と咲いてゐるのを眺め、甲州の盆地に出て更に西へ向ひ、（た）日野春あたりから次第に八が嶽の裾野に擴がつてゐる緑の色を眼にすると、いかにも鮮かなのに氣がつくに違ない。更に汽車が富士見の高原から諏訪湖畔へ下れば、日の光が波に照返るのがまことに美しい。澄みきつた日の光、頭腦の中までも透き通るや



截然と
きつぱり區別
がついてゐて

うな青い光が空を迂る。夕方ちかく桔梗が原の中央まで來れば、こゝに始めて平原と高原との對照が最も明に見られる。第一に氣のつくことは、濃淡の緑が截然と縞を織つて、山へ向つて次第に高くなつて行く傾斜地に、だんだら染の大きな緑布を敷きつめてゐることである。

松の林の濃い黒い一面の緑が、巨鳥が翼を擴げて何物かを掩ひ包んでゐるかのやうな姿をして、野と山との境目、野が山に迫つて道が次第に傾斜をなさうとする邊から、廣く横に互つて山の裾を繞つてゐる。その濃緑の松の林は、平地にある林のやうに砂塵を蒙ることは曾てない。日光がこの黒い松の林の眞上からちつと照りつけられ、その光はことごとくその黒い中に吸込まれるやうにして這入る。特にそれが雨の後



(筆月弦澤矢) 嶽が八の夏

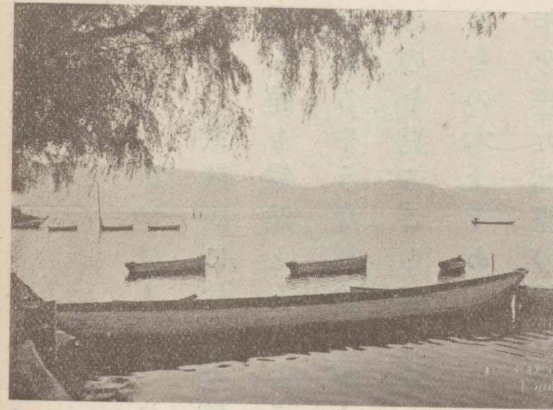
藪だたみ
藪の幾重にも
重なり茂つて
あるところ

でもあらうものなら、この松の林は飽くことを知らないもの
のやうに、仰いで満面の日光を吸入する。

松の木の單純林！これは武藏野などではなか／＼見られ
ない。武藏野には種々雑多な樹木が混生してゐる、松も杉も
檜も樅も雜然としてゐる。低い藪だたみの中に、高山の山蔭
で見るやうな杉の木がよく手持無沙汰な姿をして立つてゐ
るのを見ることがある。平原は植物の植民地である。高原
はその本土である。

年を経た高原の松の林の中に這入つて行けば、がう／＼と鳴
つてゐる不斷の響がある。これも高原でなくては聞かれな
い自然の音楽である。私は武藏野をさまよつて、小さな松の
林に出逢ふごとに、幾度その中に這入つてこの響を聞かうと

したか知れないが、遂に聞かれなかつた。この大様で常に吟誦してゐるやうな松の林の響は、平原の松の林の性急に鳴り騒ぐ響とは非常に相違してゐる。夏の日が樹間へ深く照込



湖 訪 諏

めば、松の香が高く匂ふ。眞の心の平和、自分が常に求めてゐる心の平和を見出すのは、夏の高原の松の林に於てある。松の林の上に當つて、一帯に淡緑の雑木林が見える。その緑はたとひ眞夏の日に照らされてゐる時でも、爽かな若緑である。平原にある林のやうに、砂塵に揉まれ

日光
栃木縣

て黒色に變るやうなことはない。この薄緑の幕は山の中腹を纏うて、見上げる眼にいひ知れぬ快感を與へる。仰ぎ見る緑は、たゞ一望に平かに見る緑とは、重なりあつてゐる趣に於て異なる點が多い。日光の男體山の麓の急傾斜をなしてゐる雑木林の緑のやうなのが、最もよくその大觀を盡してゐる。もくもく、もくもく、緑の雲の塊團のやうに、いかにも豊富な、そして、柔かな感じを與へるものはこの急傾斜をなした淡緑の林である。その薄緑の色に包まれて、ごろりと寝ころんで見たいやうな氣がして來る。烈しく突きつめた氣分、日常鋭く尖つてゐる神経、それが皆柔かにされて溶けるやうな氣になる。ゆつたりと伸びやかに、どのやうな心の痛みも癒やされてしまふ。平原の雑木林に這入つた時、私は心の軽くなる

のを感じる。軽く光るやうになるのを覚える。光が近く緑を透して、心の中までも沁込んで来るやうで、明るく軽い気分、重いもの、薄らいで行く感じ、物の一重々々に剥がれる感じ、やがて木の葉の風にひら／＼と翻るやうにをどるのを覚える。が、高原の淡緑林に對しては、その輕快さを覚えるよりも、柔かく澄んで、しかも、心の引締るのを覚える。平原は林に入つてもなほ、活動を忘れることが出来ない。高原の雜木林の中で、特に平原にないものは白樺の林である。同じ雜木林の中でも、比較的山の奥に近くなれば、白い幹をした木が立ち並んでゐる。葉は薄く、ひら／＼と風に戦ぐ。この白い幹に日がさして、不思議な色を反射させる。この林の中を通つて行く時には、何だか異様な國に來たやうな感じを

起させられる。

夏は、舊曆孟蘭盆まがらんぼんの時は、高原の村々で魂迎火を焚くのに、必ず白樺の幹の皮を剥いで用ひることになつてゐる。家の門口に二個所で火を焚いて、その間を迎へて來た魂の明るく通るやうにするのが習慣になつてゐる。秋はこの木の葉は薄く黄色になつて、ひら／＼と早くから風に散つて行く。

また松の林の下に、野が一層平かに水田に拓かれてゐるやうな處には、處々に柳の木が群立ちが見られる。柳の林の爽かさ。水のじく／＼湧いて流れるやうな處には、この緑の一團また一團が大きな玉のやうに圓くなつて、野の面を飾つてゐることがある。都會の中の街頭の柳に見るやうに、砂塵にまみれて黄ばんでゐるやうなあはれさはない。濠に沿うて植

舊曆 太陰曆をいふ
孟蘭盆 七月に行はれる佛事、佛及び死者にいろいゝの飲食を供へてその苦しみを救はうとするのである
魂迎火 死んだ人の魂を迎へるのだといつて家毎に焚く火

る竝べられてゐる柳、電車路に立ち竝んでゐる柳、そのあはれな姿は息も絶え／＼の有様に見えるのである。緑の野の柳のあつまり、夏の夕月がその上を照らし出す時の涼しさ、たゞ緑の精が凝つてその中から浮び出して來はしないかと思はれる。(砂丘)

よく行届いた説明に加へて、美しい色どりがあり、移り變る場面の面白さがある。それといふのも、眞に自然を見ぬいて、いはゞその生命ともいふべき深いしつかりした根本的なものをつかんでゐるからである。心ない自然ではあるが、かうして見ると、すべてわれ／＼の前に元氣よく躍り出てゐるやうな氣がする。

六 夏の歌

窪田空穂

名は通治、長野縣の人、歌人、明治十年生

太田水穂

名は貞一、長野縣の人、歌人、明治九年生

前田夕暮

名は洋三、神奈川県の人、歌人、明治十六年生

島木赤彦

本名は久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一

齋藤茂吉

山形縣の人、醫學博士、歌人、明治十五年生

窪田空穂

切株はうすむらさきの若芽して、桐となりけり六月來る日。

太田水穂

滾々と湧きてあふる、山清水、今落ちし松の葉を流しつゝ。

前田夕暮

青鱗をもろ手にさげて小磯原、夕日の方にわがくだりけり。

島木赤彦

夕暮のすゞしさはやし山畑をめぐる林のひぐらしのこゑ。

齋藤茂吉

電燈の光とゞかぬ宵やみのひくき空より蛾は飛びて來つ。

石川啄木

ふるさとのかの路ばたの捨石よ、今年も草に埋れしならん。

若山牧水

名は繁、宮崎
縣の人、歌人、
昭和三年歿、
年四十四

木下利玄

岡山縣の人、
歌人、大正十
四年歿、年四
十

島崎藤村

名は春樹、長
野縣の人、文
學者、明治五
年生

若山牧水
ゆくりなく夏野が原に現れし眞黒き犬はとほくより吠ゆ

木下利玄

道のべの崖の細瀧おちきたる力に打たすわが手のひらを。

七 山陰の旅

自の傳説を村

鳥取の停車場を離れてから、またもや私は汽車中の旅人となつた。私は今山陰道の海岸に沿うて、傳説の多い地方を旅してゐる。

湖山池も近いと聞くと、私は湖山の長者の傳説を自分の胸に思ひ浮べて見て、お伽話の世界にでも心を誘はれるやうな思がした。その傳説によると、長者は多くの人を使つて、一日の

中に自分の所有する廣い田地の植付を濟さうとした。また手に持つ扇を擴げ、西の空に沈みかけた太陽をさしまねいて、その日の中にすつかり苗を植付けてしまつた。しかし、この自然を無視したやうな行は、それ相當の報を受けないわけに



島崎藤村

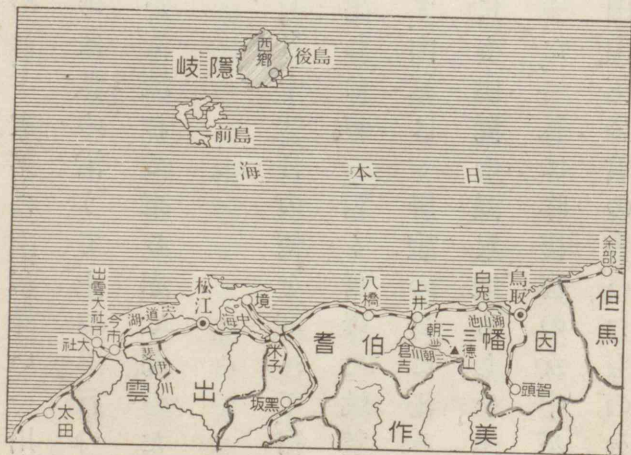
は行かなかつた。長者の田地は一夜の中に青々とした湖水に變つてしまつたといふのである。この傳説の世界が今眼の前にある湖山池であるのだから面白い。島二つほどある靜かな湖水だ。私がその湖面を望んで通り過ぎようとした頃に、俄に夕立が湖水の上へも汽車の窓の外へも來た。もつと古い傳説を、傳説といふよりは古い神話の残つてゐる

地方を、私は松林と砂山との多い因幡の海岸に見つけることも出来た。旅の心は白兔の停車場に到つて驚かされた。私は出雲まで行かない中に、ずつと大昔からの言傳へがこんな處にも残つてゐるか、とまづそれに驚かされた。大國主命が大勢の兄弟と共に旅した稻羽の海岸は、こゝだといふことに氣づいた。智恵のある白い兔が隱岐の島から鰐の背を渡つて來たのも、こゝだといふことに氣づいた。あれは古い神話の中でも楽しいもの、一つだ。私の傍には鳥



湖 山 池

取から一緒に汽車に乗つて來た新聞記者もゐて、鰐とは青い鮫のことで、それが古代の海賊のことであり、白い兔とは善良な民族のことであるといふ一説を話して聞かせてくれた。因幡の國境を離れて伯耆に入つた頃、また夕立がやつて來た。暗い空、黒い日本海。車窓の硝子に映る水平線の彼方には、僅に空の晴れた處も望まれたが、やがて海へも雨が來た。私は上井の停車場で一旦汽車からおりて、三朝行の自動車に乗換へた。



七月十三日
昭和二年

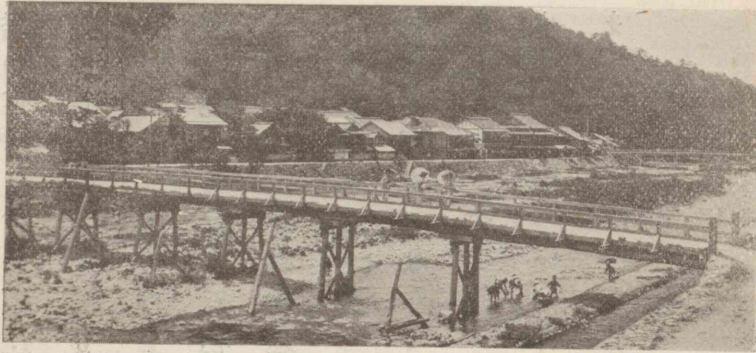
雨を衝いて二里ばかりの道を駛つた。次第に山が深い。川がある。橋がある。三朝川といふのは私の沿うて上つて行つた溪流だが、やがて私は川上の方から流れて来る赤く濁つた水を見た。

三朝温泉の旅館に一夜を明かし、七月十三日の朝を迎へて、宿の二階の廊下に籐椅子などを持出しながら、暫く對岸の眺望を楽しまうとした。雨もあがつて、山氣は一層旅の身に沁みだ。こゝで聞く溪流の音はいかにも山間の温泉地らしい思をさせた。河鹿の鳴聲も涼しかった。私は昨夜宿の女中が持つて來て見せた書畫帳の中に、田山花袋君の書いたものを見つて、大正十二年この地に遊ぶとしてある言葉などを讀んで、何となく舊知にめぐり逢つたやうな心地もした。「さうか、

田山花袋
名は録彌、群馬縣の人、文學者、明治四十年生

震災

大正十二年九月に關東地方にあつたのを



あの友達もこの宿に泊つて、旅の時を送つて行つたのか」と思つた。大正十二年といへば、私達には忘れられない年だ。恐らくあの友達がこの地に遊んだのは、東京へ震災の来る前のことでもあつたらう。あれからも、うかなりの月日が経つた。私の眼にある三朝川、白く黄ばんだ土手の上の趣のある道、兩岸に相對する温泉宿、これらの眺はあの友達の來て見た頃と同じやうであるのか。その川へは、鶴鴿が來た、鮎を釣る男も來た、こゝの

三徳山
三朝温泉の東
方にある、山
上に三佛寺が
ある
城崎
兵庫縣
熱海
静岡縣
箱根
神奈川縣

橋の下へは村の娘達が水泳に來たと、私は眼前にあるものを
指さしていふこゝも出來たけれども、あの友達の來て見た頃
には、これよりもつと野趣のある土地であつたかどうか。
温泉地としての三朝の發展は十數年このかたのことだと聞
く。三徳山參詣者達のために昔風の温泉宿があつた以前の
ことに比べると、今の三朝は別天地の觀があるともいふ。三
朝は將來どうなつて行くのか。温泉地としての城崎さきを熱海
あたりに比べていゝものなら、こゝは箱根あたりに比べても
よからうか。いづれにしても、三朝川の溪流の音だけはこの
まゝ變らずにあらせたい。(名家の旅)

少しの無理もなく、少しの無駄もなく、どつしりと落付いた文章である。

これをたゞ上手だとか達者だとかいつてしまつてはいけない。筆さ
きの器用さや言ひまはしのうまさなどが殆ど見つかからない點に、却つ
てこの文章の立派な特色がある。

河井醉茗
名は又平、大
阪府の人、詩
人、明治七年
生

へ小曲

○芝

河井醉茗

芝を焼き、芝を焼きしが、
そのあとに、
春の芝生はいよ／＼繁く青く、
やはらかに歩む足にさはり、
かつ坐せんと思ひぬ

○蕎麥畑

百姓の手より
蒔き放しにせし種子なれど、
程よく一うねごとに、
蕎麥の花は盛りなり。
われら、
ものゝ種子を蒔くすべさへ知らず。

○窓より

砂は清らに、
松は疎らに、
山脈は遠く連なりて、

わが書齋の窓より見る風景は
世にありふれし風景なり。
ありふれし風景なれど、
飽かぬ思あり。 (日本詩集)

「芝は懐かしい感じを誘ふ。蕎麥畑は見たばかりの文字以上に、何かしら深い大きな意味を思はせる。「窓より」は作者の日常生活とそのさつぱりとした心持とを示してゐる。

武者小路実篤

九 だるま

登場人物

だるま

A

武者小路実篤
東京の人、文
學者、明治十
八年生

B
僧侶

だるまの修行してゐる小さい堂の前A・B登場。

A この堂に住んでゐる男を君は知つてゐるかい。

B 知らない。

A さうか。この堂の内には珍しい男
が住んでゐるのだ。

B どんな男だい。



武者小路實篤

A 八九年の間壁ばかり見てゐるといふ男が住んでゐるのだ。
B 壁を八九年見てゐる？ 何のためだい。

A 何のためだか分れば珍しい男ではないことになるが、誰も
何のために壁と睨めつこをしてゐるかを知つてゐるもの

はないのだ。世間では皆、あれはどうせ白痴だらうといつ
てゐる。

B そんな大きな聲でいふと、内へ聞えやしないか。

A 大丈夫。白痴で、その上聾こと來てゐるのだからね。

B 聾なのかい。

A 聾なのさ。

B それで壁ばかり見てゐるのかい。

A さうだ。壁ばかり見てゐる。

B どうして食つてゐるのだい。

A 近所の人間が飯だけは缺かさず持つて來て、入れてやつて
ゐるらしい。

B それは感心だね。

A 時々、それは飯を運ぶのを忘れることもあるだらう。三日や四日、運ぶのをわざと忘れて見たことがあつたが、平氣でやはり壁を見てゐたさうだよ。

B づう／＼しい奴だね。

A だが、白痴としたら出來のいゝ、白痴で、悪いことは何もしないのだ。そして、たゞ壁ばかり見てゐるのだから、始末はいいのだ。餓死されると困るので、飯は食はしてゐるが、それもごくすこしきり食はないのだから、別に困ることはないのだ。

B だが、飯をやらなかつたら、何處かへ行くだらう。

A 所が、そんなことが考へられる男ではないやうだ。飯を入れてやらなければ出て食ふなどいふ考は起らないらしい。

B 珍しい馬鹿だね。

A その癖、顔だけはなか／＼こはい顔をしてゐる、賢さうな顔をしてゐる。こんな話がある。何年前かに戦争があつた時、敵の兵隊がこゝを荒したことがあつたが、この内にあるやつこさんだけは逃げないで、やはりこゝで壁を見てゐたさうだ。皆が逃げろといつたつて、聾だらうだから平氣であるので、皆も死ぬなら勝手に死ぬが、いゝと思つて逃げたのださうだが、やつこさんはそんなことは一向平氣で、相變らず顔を壁に向けて坐つてゐたら、敵兵が這入つて來て、首を斬らうとしたさうだが、やつこさんは平氣でゐたさうだ。あんまり平氣なので、兵隊の方でこはくなつて、これはよつぼどえらい人に違ない、聖者に違ないと思つて、お辭儀をし

て逃げたさうだ。誰だつて、顔を見ると白痴だとは思はな
いからね。

B どんな顔をしてゐるのだい。

A 見たければ見せてやらう。(戸をあけようとする)

B 黙つて戸をあけてもいゝのかい。

A いゝとも、聲をかけたつて聞えやしないからね。時々人が
來ると、僕はこゝをあけて見せてやるが、自分の首が落ちか
けたつて平氣な男だから、戸ぐらゐあけたつて驚きはしな
いよ。(戸をあけようとする) なか／＼かたい戸だよ。(あける) ど
うだ、なか／＼えらさうな顔をしてゐるだらう。白痴とは
思へないだらう。

B 思へないね。なか／＼鋭い顔をしてゐるね。ちよつと見

ると、白痴といふより狂人に見えるね。

A だが、狂人としてはおとなしすぎるのだから、やはり白痴な
のだらう。

B さうかね。見かけはなか／＼堂々としてゐるね。白痴と
はどう見ても見えないね。

A 人は見かけによらないといふがほんたうだね。僕ははじ
め、こいつはきつと利口な人間なのだが、心願のために無言
の行をしてゐるのだと思つて、内々尊敬してゐたが、あんな
り鈍いのでがつかりしてしまつたよ。この前、僕がこゝを
通つた時、一人の男があいつの頭をなぐつて、いゝ音がする
だらう。といつてゐたがね。僕はあいつが起ちあがるかど
うかするだらうと思つてゐたが、少しも表情が變らなかつ

た。つまり何にも感じなくなつてゐるのだね。

B さうかね。しかし、人間もそこまで馬鹿になれ、ば結構なことだね。

A ほんたうだよ。僕もその點ではこいつに感心してゐるのだよ。なんだつてこはいものはないのだ。餓死すること殺されることも平氣なのだからね。なぐられたつて悪口されたつて、蚊がとまつたほどにも思はない。そのかはり楽しみなんかも何も感じないだらう。何のことはない、金で造つた彫刻のやうなものだね。もう生きながら死んでゐるやうなものだね。たゞ息がかよつてゐるといふだけに過ぎないね。人間もかうなつてはおしまひだよ。だが、そのかはり心配もないだらう、苦勞なんかもないだらう。

これぐらゐ呑氣な人間はないだらう。

B しかし、ほんたうにあれで白痴なのかね。僕にはさうは思へないね。

A しかし、利口な人間が今時にこんなことを八九年も續けることは出来まい。だつて、壁を見てゐたつて何になるだらう。何にもなるわけはないではないか。

B それはさうだね。しかし、頭を叩かれてもほんたうに顔色を變へないかね、たゞ變へないふりをしてゐるだけなのではないかね。

A いや、確に變へないね。僕はよく見てゐた。

B しかし、遠くで見てゐたのだらう。それでは、目玉の動きなんかよく分るわけはない。

A それなら、僕が一つ頭を叩いて見るからよく見てゐ給へ。
B 叩いても大丈夫かい。この男にいきなりどなられたら腰を抜かしさうだよ。何しろこんなこはい顔は滅多に見たことはないからね。

A 大丈夫だよ。いゝかい。なぐるからよく見てゐ給へ。

B 大丈夫かい、ほんたうに。

A 大丈夫とも。よく見てゐ給へ。

B よく見れば見るほど珍しい顔だね。どうもこいつが怒り出したら、締殺されて喰はれさうだね。

A いや、こいつは實におとなしい奴なのだ。こはいのは顔だけだよ。それならなぐるよ。

B よし。

A、頭をなぐる。

A どうだ。

B 不思議だね。どうも不思議だ。もう一度なぐつて見てくれないか。(傍による)

A よし。(またなぐる) どうだ、やつぱり變らないだらう。

B 變らない。不思議だね。生きてゐるのかね。

A 生きてゐるにはきまつてゐるよ。

B どうもやつぱり君のいふ通り、この男は白痴だね。神経がないのだね。僕はこんな男を見たことはない。土産話の一つ僕も打たしてもらはうかね。

A あゝかまはないから、遠慮なく打ち給へ。

B まるで君のものゝやうだね。はっ、はっ、はっ。

A はっ、はっ、はっ。

B 一つそれではなぐらしてもらはうかね。

A 遠慮なく。

B それでは、今度は君が見てゐてくれ給へ。

A よし。

B なぐるからね。(なぐる) どうだ。

A なんともない。

B ほんたうにこの頭はなぐるといゝ音がするね。もう一つなぐつて見てもいゝかね。

A いゝとも。

B お許しが出たからなぐるかな。だが、氣の毒だね。

A 感じないのだからかまはないよ。



るぐなてめこを力

B 一つうんと力を入れてなぐつても大丈夫かね。

A 君の力ぐらゐなら大丈夫だらう。

B 不意に感じて飛びあがられてはびつくりするね。

A 大丈夫だよ、この前なぐつた奴は君より力が強さうな男だつたよ。

B それなら、これが最後だから、話を種に力一はいなぐつてやらう。(力をこめてなぐる)

だるま (同時に) 喝

二人腰を抜かす。

A 許して下さい。

B 許して下さい。

だるま黙つて立つて、外へ出て便所に行く。

A なんだ、小便に行つたのだ。びつくりしたな。あの聲には驚いたな。何といふ聲だらう。

B ほんたうにびつくりした。逃げ出さうか。

A あんまりびつくりしたので、腰が立たなくなつてしまつた。

B おれの腰もいふことを聞かなくなつた。だから、よせばよかつたのだ。君があんなことをいふので、ひどい目にあつた。どうなるだらう。

A ともかく逃げられるだけ逃げるとしよう。(あざりながら逃げ

ようとする)

だるま歸つて来て、また以前の處に坐る。

A こいつは逃げないでも大丈夫だよ。やつこさん、びつくりして聲は出したものゝ、そこが馬鹿の本性で、なぐられたことは氣がつかず、おれたちのあることは知らないのだ。不意に小便に行きたくなつたゞけなのだ。君があんまりひどく叩いたので、ひよつと氣がついたら、小便に行きたくなつたのだらう。何でもなかつたのだ。

B 随分驚かされたな。あの聲には、一時はどうなるかとおもつた。

A もう一度なぐる元氣があるかね。

B もうとてもない。腰は立つかね。

A やつと立ちさうだ。随分驚いたね。壽命が三年もちよこ
まつたやうだ。

B どうも意氣地のない話だね。

A い、話の種が出来て嬉しいだらう。

B しかし、腰を抜かした話は内證にしておかう。

A あんまり名譽なことでもないからね。

B 君はもつと度胸があるかと思つたよ。

A しかし、僕にはもう一度ぐらゐなぐれる元氣があるね。

B ほんたうかい。

A ほんたうとも。だが、君が驚くとかはいさうだから止めて
おかう。

B 何、僕はあの戸口で見てゐるから、なぐれるなら一つなぐつ

て見せてもらはう。だが、なぐる勇氣は君にはないだらう。
さつきのやうでは、とてもそんな勇氣が君にあるとも思へ
ない。

A なくつてどうする。一つおれの勇氣を見せてやらう。こ
はごはだるまに近づき、手を振上げる。

だるま、振向く。

A (跪き)お許し下さい、お許し下さい。

だるま 今日は何日かな。

A・B びつくりして口をもがくする。

だるま お前さん方は聾なのか。

A いえ、いえ。

だるま 今日は何日かな。

A へい、今日は十一月の十二日で御座います。
だるま さうか。それでは、今日でまる九年こゝにゐたわけだ
な。

A へい。

だるま (立ちあがり) 鈍骨のおれも九年でやつと悟の道を得られ
たわけだ。佛さんのおつしやつたことはほんたうだつた。
ありがたう、ありがたう。

二人あつげに取られて見てゐる。

A あなたは龕ではなかつたのですか。

だるま 龕ではない。

A さつきの失禮をどうぞお許し下さい。

だるま お前さんは私に何もわるいことはしなかつたではな

いか。

A それでも、あなたの頭をお打ちして。



若い僧が最敬をす

だるま あ、お前さんだつた
か。それはどうもありが
たう。お前さんに頭をぶ
たれたので、私は悟に入れ
たのだ。佛さんがお前さ
んに乗り移つて、私をぶつ
て下さつたのだ。

若い立派な僧侶一人登
場。だるまに最敬禮を
する。

土岐善麿
東京の人、歌
人、明治十八
年生

僧侶 佛様からのお告でお迎に参りました。
だるま さうか、それなら一緒に行かう。(二人に氣輕にお辭儀し) さ
つきはどうもありがたう。

僧侶だるま退場、二人あつげに取られる幕。(現代戯曲全集)

ちよつと見ると一口話のやうに出来てゐるが、しかしよく讀んで行け
ば行くほど自然に深く考へさせられる。その男がためらひながらも、
やがて思ひきつてなぐる。そして、だるまの一喝に遇つて腰を抜かす。
だるまは「お蔭で悟れた」といつて、落付きはらつてゐる。何から何まで
ことごとく面白い。

二 水郷風俗

土岐善麿

「マルケンとヴォレンダムとを見ないで、オランダに來たとい
Marken Volendam Holland

ふなといふ。それほどその風俗習慣が珍しいものになつ
てゐる。

アムステルダ
ム
オランダの首
府

アムステルダムから汽船に乗ると、朝の運河を縫つて、しつと
Amsterdam
りと靜かな水郷の情趣を味はひつゝ、悠々閑々たる行程、命が

延びる。



土岐善麿

小さな白塗の汽船は乗客が皆漫遊の
人々ばかりなので、甲板だけが賑はふ。
America
アメリカから來た數名のおしやべり
Spain
な女連れ、ひそ／＼話の若夫婦、人のよさ／＼うなスペイン人、そ
の他。

◇
牧草を積んだ岸の小舟、すれ違ふと、だぶ／＼と浪が揺れるの

で、漕いでゐた母親が子供を抱きながら岸邊の草につかまつて、汽船をやり過ぐす。雨がぼつ／＼落ちて来る。牛鷗教會堂風車。

途中、ブロエクといふ小村におりて、その物持らしい一軒を訪ふ。隅から隅まで、實に綺麗に片付いてゐる。日本の田舎家の陰氣くさく泥ぎたないのとは比較にならない。

フロマーヂュを製造してゐる。子供の頭ほどの眞赤な球がいゝころの柔かさと堅さで、ごろ／＼と並べてある。おかみさんが切つてくれる。牛乳を一杯飲む。戸棚かとおもつて覗くと、そこは子供の寢室で、かはいゝベッドが幾臺かあつた。またその隣の戸棚を覗くと、そこには今大きな鍋のなかに、

フロマーヂュ
チーズ(乾酪)

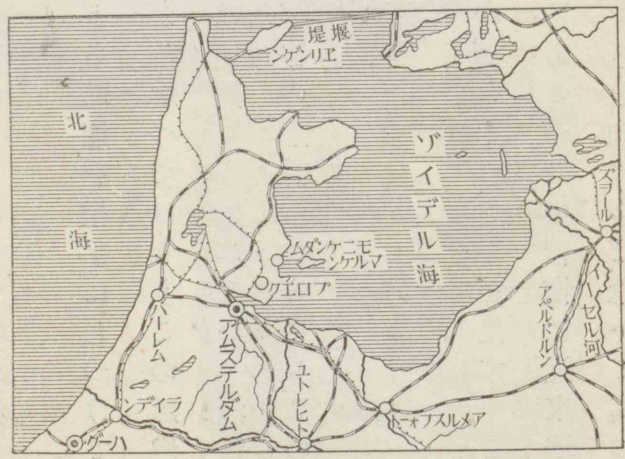
Fromage

Bed

りじりとうまさうなにはひと煙をあげてゐるビフテキが見えた

Beefsteak

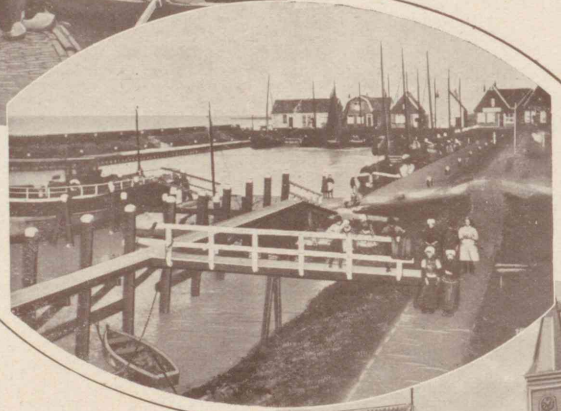
モニケンダムからゾイデル海を越え、そこに浮んだ小島がマルケンだ。堤をあがると、その下に續く木造の家並。皆歩きにくさうな木靴をはいてゐる。男は木曾の山中で見るやうな黒のタツツケをはいてゐる。女は綺麗な更紗の上着にスカートをはき、裾長くふはりをつけてゐる。大人も子供達も、男女皆一様の風俗である。



見 所 ダ ン ラ オ



よいお天気だ、微風のさゝやき、
水に親しい町と人と。
よい夏だ、よい午後だ、
清らかな道のほとりにも、
明るい陽の光が
そゝぎかゝる。



上圖は ヴォレンダム
漕ぎ行くさきは？
中下圖は マルケン
物珍しげに
上陸した人々。
仲のよいそゞろあるき。

コスチューム
衣裳、服装

國粹保存
その國のすぐ
れたところを
後に永く傳へ
残すこと

大きな籃を肩にさげて、村の娘達が土産物を賣りに来る。おもちやの木靴、眞鍮製の風車、寫眞繪葉書、自分達の着てゐるやうなコスチューム。

Costume

イギリス・アメリカなどのおのぼりさん達を相手にしつけてゐるので、いくらかさすれてゐる。かうなつては、もうこの風俗をやめて新しい文化に入ることが困難かも知れない。漫遊者のための國粹保存でもあるが、彼等の生計のためにも、この着物を脱ぐことはできないらしい。

◇
子供達が側へ寄つて来て、「錢をくれ、錢をくれ」と手を出す。この乞食根性は案内書にも書いてあるが、この習慣は近來法律で禁止されてゐるさうな。レンズを向ければ、急いで集つ

Lens

て来る。子供達は遊戯をするやうな姿になつて、木靴サボウの音高く踊る、歌ふ。

◇

島をあとに、對岸のヴォレンダムに渡る。こゝの漁師の姿はます／＼おもしろい。今から三百年前、はる／＼わが平戸へ上陸したのもこの連中の先祖であつたらう。青木昆陽など、覺束ない毛筆で寫したオランダ文字も、この連中の話によつて覺えたに違ない。長崎の文化——そんなことを回顧すると、へうきんな子供達にチョコレートChocolateでも買つてやつて、お禮をいひたくなる。

◇

その晩アムステルダムHotelのホテルに雨を聞きながら、きのふ草

平戸
長崎縣
青木昆陽
江戸時代中期
の蘭學研究者

わが村莊
東京の郊外目
黒にある
歌ごころ
歌をよまうと
するゆかしい
心持

花店から送るやうに注文したチューリップやヒヤシンスの球根が、やがてわが村莊の斜面に芽を出す喜びを思つて、珍しく静かな歌ごころが起つた。(外遊心境)

何といふさつぱりした文章だらう。そしてまた、何といふ生きくし
た文章だらう。海の上にも、船の中にも、島を訪へば島にも、目新しい面
白いものばかりである。それをたゞそのまゝ文字に出し言葉に寫し
たので、讀む人の心がおのづとそその境地に惹きつけられる。

正木不如丘

名は俊二、長野縣の人、醫學博士、文學者、明治二十一年生
善光寺
長野市にある

二柱

正木不如丘

長い石疊に參詣人の下駄の音を響かせつゝ、善光寺の本堂は大峰山の頂を僅に残して、澄んだ秋の空に聳えてゐる。

二十年を過ぎた今日、私は少年の頃の思出を辿るべく善光寺

灰燼に歸した
焼けてしまつた

に詣でたのである。辛うじて私が物心のついた頃の、或夜の大火に灰燼に歸した仁王門はたゞ眞紅の焰として記憶に残るだけで、私の少年の日には、仁王門址の石臺ばかりの善光寺であつた。今では、また新たに仁王門が立つてゐる。

御開帳
こゝでは、と
ばりをあげて
佛像を拜める
やうにするこ
と



正木不如丘

私は本堂に這入つた。頭の上に大きな燈籠のあるのは、今もなほ二十年前と變らない。何年に一度しかない御開帳の日に、御判頂戴にまかり越した時、一列にならんだ善男善女の群に混じてゐた自分を描いて見る。

恐らくこのあたりであつたらう、紙にひねつたお賽錢を進じて頭を垂れた少年の頭に、南瓜ほどの御判を高いところから

極樂への御鍵
暗い階段をお
りて行つたと
ころにある、
手さぐりにそ
れに觸れたの
がよいとして
ある

手を伸ばして遙にくだし給うた御坊のありがたい様子をおもひ出す。やがて私は御坊のおゆるしを受けて、御戒壇に這入る。闇の中に阿彌陀佛の聲の洩れるのは少年の日と少しも變らない。たゞ極樂への御鍵に、今度は手が觸れなかつた。あの頃には、いつも右手を高々とさしあげて御壁に觸れて行く時、がらと御鍵は手に觸れたものを。私は御戒壇の暗闇から御堂の外縁に出て、秋の光に眼のくらむのを覚えながら、外縁を東から北へ、北から西へと廻る。西縁の眞中まで来た時、私はふと一つの柱を仰ぎ見た。その柱の高さは何十丈あらうか。上はほのかにうす暗く、それから二間ほど外の屋根のはづれからは、澄みきつた秋の大空が光

弘化年間
弘化四年(五
七)

つて見えた。柱は麓から峯まで、ゆるく一ねぢりねぢられてゐる。古老の話に聞く。昔弘化年間に、善光寺の大地震に町家が丸潰れになつた中を、善光寺だけは何の障りもなかつたといふ。三日三晩打續く地揺れの中に、御堂に逃げて来た人々の耳に、御堂がぎし／＼と鳴つたといふ。その音こそはこの柱のねぢれた音だと、後になつて人々は知つた。柱こそは善光寺を救つたものであつた。



善光寺

ごうろ山
石材を切り出
すところ、石
のくづれ落ち
るのが大砲の
音のやうに響
く

私はこの柱に倚りかゝる。大峰山は茸狩の客を呼ぶぐらゐの高さである。それから續く飯繩戸隠は白雲に近い。遙に左によつて朝日山が一本松を寂しく領する。私はふと秋の空に鳴り響く大砲の遠音を聞く。それはごうろ山が崩れるのである。背伸びをして見れば、辛うじてごうろ山が見える。八幡山よりなほ低いごうろ山が見える。私はまづごうろ山の低くなつたのに驚く。少年の日には、八幡山とその高さを比べた山であつた。

私は柱に倚つて、少年の日のごうろ山を思ふ。少年の頃私は長野の西郊に住んでゐた。二階の高窓の下に弟を四つん這ひにさせて、私はその背に乗つて高窓から屋根に出た。屋根瓦の隙にゐる雀の子はちゝと聲を立てゝ、外に出て行つた親

を呼んでゐた。私は小さな手を危く伸ばして、雀の子を手に握つた。その時に、日永のだるい山國の空に、ごうろ山は響を立てゝ崩れた。

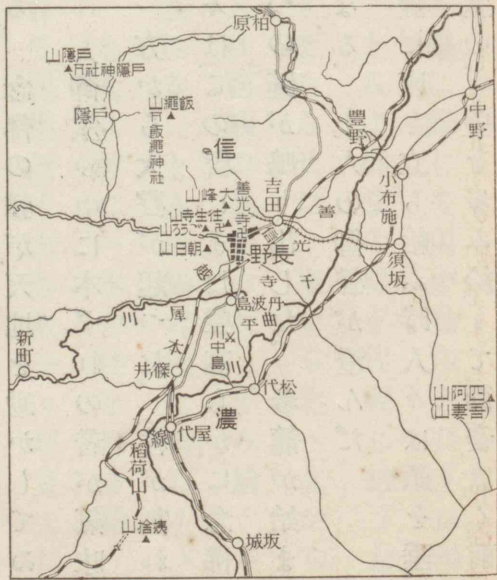
夏の日、裾花川に水泳に行つた歸路に、途中の坂の上からわが家のあたりの家々を遙に見た時、大砲の響を立てゝ、丈にも餘る大石が砂煙を立てゝ、ごうろ山から落ちた。秋の夜の蟲の音のする時、雪積む朝の學校通ひの時、ごうろ山は夜となく晝となく、春となく秋となく、崩れてゐた。

岩ばかりのごうろ山は、一雨にも一月の早にもくづれ落ちた。かうして、山裾を流れる裾花川の堰きとめられたといふ噂は、幾度か長野の町の人々の話題となつた。

二十年過ぎて來て見れば、ごうろ山はさても低くなつてゐる。

この後二十年三十年を過ぎたならば、恐らく山の姿は失はれてしまふであらう。五十年の昔、百年の昔、ごうろ山はやはり崩れたであらう。その古の山の姿と今の山の姿とを、私はねぢられた堂の柱に倚つて思ふ。柱は弘化年間のまゝのねぢられた静けさに、私の背から遙に何十丈の高さに立つてゐる。數年前米壽の賀を祝つた私の祖母は、弘化年間長野から三里ある四阿山の麓の須坂にゐた。三日三晩大地震の續いた時、戸外に寝たさうだ。善光寺の空は二日の間、夜になると眞紅であつたさうだ。この地震の最も強かつたのは善光寺の町であつた。地震後

無事だつたものは善光寺の本堂だけであつたが、潰れ家は直ちに火を發して、二日の間焼け續けた。山崩れのために丹波島で犀川が堰きとめられたので、千曲川と犀川の水が方五里の善光寺平に満ちて、死人の數が一層多くなつた。その水が十日後に堰をきつて越後に落ち、越後は大洪水を起した。地震を免れ、火を免れ、水を免れた人々は皆善光寺の本堂に集つた。その人々の口からは南無阿彌陀佛が念じられ、その聲



が御堂に寄せて来る火の手、水の手を封じたといふ。御堂の中は隙間もなく人を以て埋められた。御坊達は火の手を案じて、如来を本堂の真中にある堀井戸に沈めまゐらせるために、上人の言葉を待つてゐた。板一枚を引けば如来は堀井戸に沈み給ふのである。念佛の聲が天地を動かしてゐる。一揺れ来る。ぎし／＼と御堂の中に木ずれの音が氣味悪く響く。その時御堂の一方から大聲が起つた。「柱が割れるぞ。」縁に満ちてゐた人々は、この聲にまた聲高らかに念佛を唱へた。鐘樓から明六つの鐘が鳴り出した。参籠が始まるのである。人々は靜になる。上人の御聲が澄んだ。おつとめが終つて上人が靜に座を立ち給ふ時、人々は頭を垂れた。上人はツツツと本堂の中を歩み給うて、御姿尊く前

縁に立ち給うた。町家は灰燼に歸して、川中島のあたりは漫漫として水が湛へてゐた。上人は御堂の縁を巡視し給うた。人々は頭を垂れて道を開きまゐらせた。東から北へ、北から西へと歩を運び給うた。上人は、西縁の真中にたゞずみ給うた。その時また一揺れ大地が揺れる。上人の御耳近くぎし／＼と音を立てるものがある。上人は靜に一本の柱を仰ぎ給うた。柱は半廻りほどねぢれて、屋根近く大きなひびが見えた。「南無阿彌陀佛。」上人は廻り縁を一周し給うて、御堂の奥に入り給うた。上人の仰ぎ給うた柱のことは、御堂に籠る人々に口から口へと傳へられた。西縁には人影一つ見えなくなつた。その柱一本に人々の不安は集つたのであつた。初震があつてから十日過ぎた。堰きとめられた大河の水は

看經
讀經、もとは
經文を默讀す
ることにつ
た

日一日と水量を増して、町の低地は既に水に浸つた。御堂の人々は夜の明けるたびに水の近づくのを見て佛名を念じた。如來は堀井戸に沈めまゐらせたといふものと、水が御堂を没するのにも近いので、夜の間こそつと往生寺山に移しまゐらせたと説くものがあつた。が、朝夕の看經かんきやうに何の異變もなく、上人の御聲は澄み渡つてゐるので、御堂を見捨て、山へ逃げ

るものとは一人もなかつた。十日目が鐘に明け離れた時、看經が果て、上人は再び御堂内を巡視し給うた。御衣のひだ尊く上人が前縁に立たせ給うた時、水は既に仁王門に迫るかと思はれるほどの近さまで來てゐた。上人はその水を遙に見給うても眉一つ動かせられず、靜に東から北へ、北から西へと外縁に歩を進められた。

鹿島
今茨城縣にあ
る鹿島神宮、
そこに要石と
いふのがあり
地震を封じこ
めてゐるとい
はれてゐる

西縁に來給うた時、そこには人影がなかつた。上人は縁の真中まで進んで、柱の峯を仰ぎ給うた。柱は全く一ねぢりねぢれてゐる。上人が柱の峯から麓へと御眼を移し給うた時、そこには奉書一枚の貼紙があつた、墨痕美しく、

鹿島から飛脚で來ればよいものを、地震に來られて
如來迷惑。

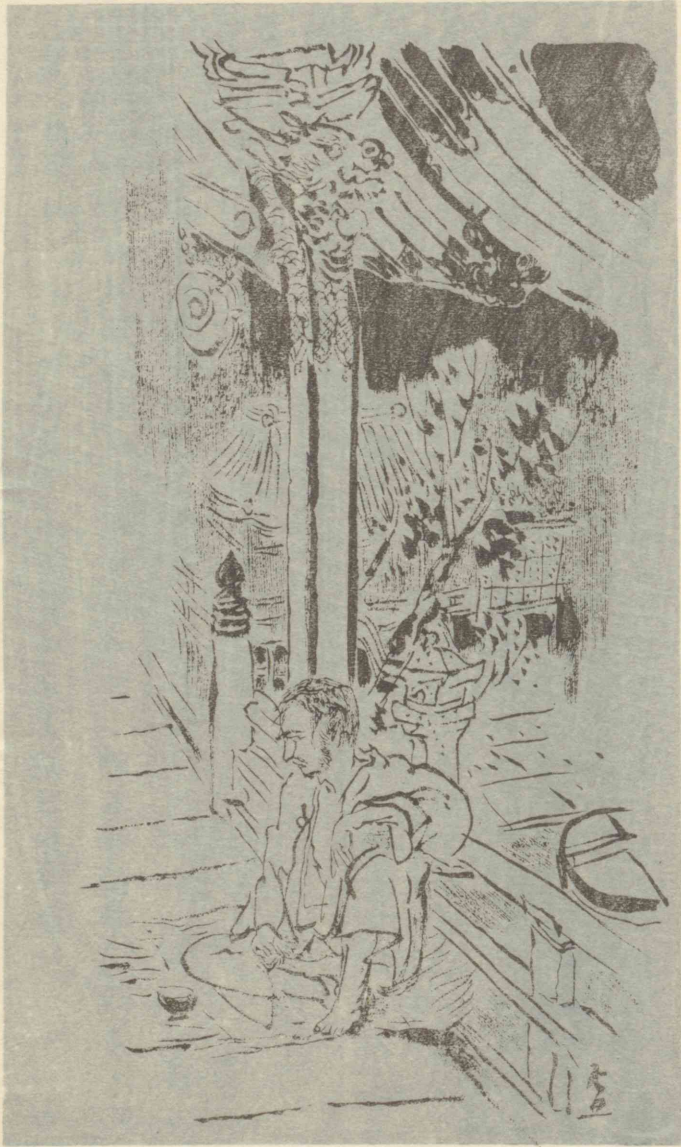
讀み終へ給うて、上人は前縁に進まれる。再び立つて水を見給ふと、水はいつの間にか堰き切つて落ち、丹波島まで大地が現れた。「南無阿彌陀佛」尊い御姿は御堂の奥に消えた。上人は畏くも御連枝尼上人に渡らせ給ふ。水火の攻めに十日を堂籠りした人々は、善光寺平の水が一舉にして越後へ流れ去るのを見て、鬨の聲を揚げて御堂から町

まどろみ
うとく／＼睡る
こと

を指さして坂道を下り、續く人々の群に押されて、先の人々は足を止めることが出来なくて、川中島まで水の上を歩き、先は姨捨山まで押上げられたといひ傳へられる。

御堂の中には人影がなくなつた。その寂しい御堂にたつた一人眠りこけてゐる怪人があつた。彼はいつ何處から御堂に湧いて出たのであらう。つゞれを身に纏つてゐるが、眉と額とには高貴の相が表れてゐる。善光寺建立以來からのまどろみを續ける如く、彼は平和に靜にまどろむ。彼の背には柱が高い。その柱は峯まで一ねぢりねぢれてゐる。彼は西縁のその柱の下に、背を丸くしてまどろむのであつた。暮六つの鐘が鳴つた。町の焼跡にゐた人々は雨露を恐れて、また御堂に歸つて來た。仁王門を通つて御堂を仰げば、御堂

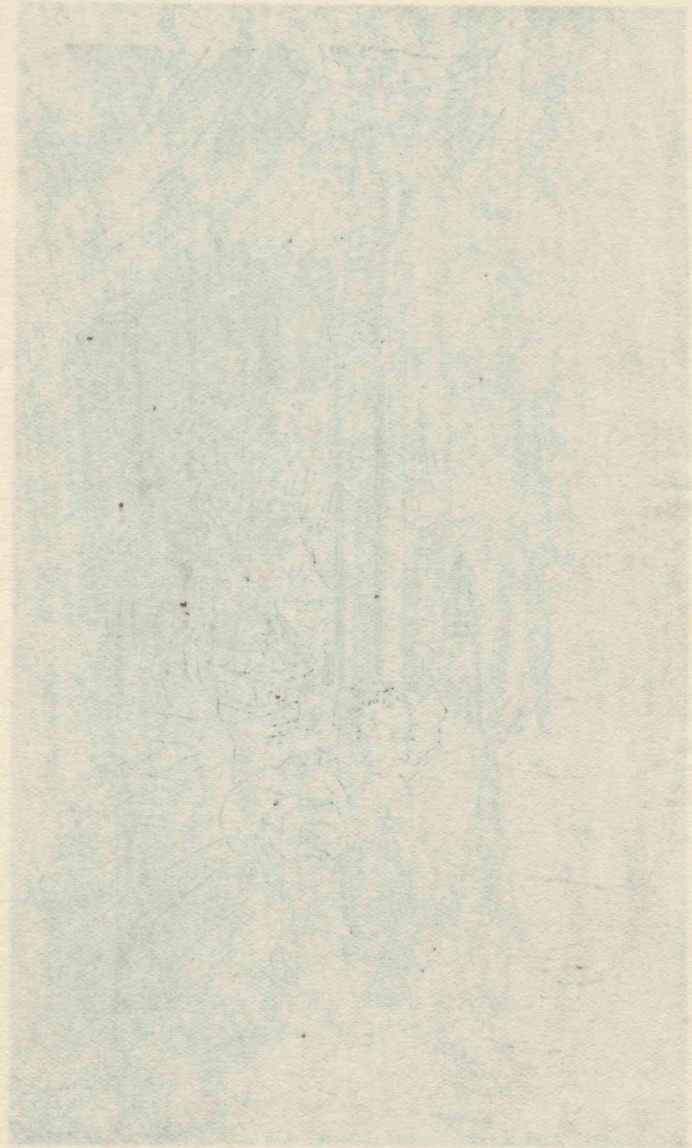
柱の不思議 (木村莊八筆)



あらたかな
神佛のみしる
しのみえる、
靈驗のある

僧俗
坊さんと普通
の人々と

経典下巻 卷之八



の灯の稀なのに、西縁からあらたかな光がさす。人々は石疊にひれ伏して六字を稱へる。遙に西縁を見きはめれば、上人を眞先に千人の御坊が跪いて六字を稱へまゐらせる。その聲が大伽藍を揺り動かす。先に堂に歸つた人々は西縁の庭に坐して、頭を垂れてゐる。柱に後光がさす。その柱の麓にまどろみ給ふのはつゞれを召し給ふ如來であつた。

上人の先稱に僧俗續きまゐらせるほどに、後光は漸く淡く、やがて如來の假の御姿は消え失せ給うた。

「南無阿彌陀佛」上人の御聲が衆號の中に澄んだ

柱に如來が御姿を現し給うてから既に八十年。その年月にごうろ山は日夜崩れて形を變へた。柱は弘化年代のまゝのねぢれたものである。山河全からず、柱だけが全い。尊い姿

の柱に倚つて、私はごうろ山の轟く山崩れに驚くばかりである。(とかけの尾)

現に眼の前に見てゐることから、少年の日の思出を引出し、更に昔あつた恐ろしい出来事を述べて、やがてまた現在の「柱」のことで結んでゐる。一氣に書きつゞけた筆の運びが、書いてある事がらをいかにもよく活かしてゐる。柱から寺、寺からその周囲といふ風に、文章の何處にも少しの隙間もなく、そして、よくまとまりがついてゐる。

(96)

ふ思を溪

三 溪を思ふ

若山叔水

疲れはてしこゝろの底に時ありて、さやかにうかぶ
溪のおもかけ。
巖が根につくばひをりて、聴かまほしおのづからなる

さやかに
はつきりと
つくばひをり
て、
しゃかんでゐ

その溪の音

二三年前の夏の中頃であつたかと思ふ、私はかういふ歌を詠んだのを思ひ出す。その頃よりは一層心の疲を覚えてゐる。昨今、溪はいよゝゝ懐かしいものとなつてゐる。ぼんやりと机に凭れてゐる時、脇見をするのもいやで汗を拭き、街上を歩いてゐる時、幻のやうに私は深い山奥に流れてゐる小さい溪の面影を、瞳の底に心の底に描き出して、何ともいへぬ苦痛を覚えるのが一つの癖となつてゐる。

蒼空を劃るやうな山と山との大きな傾斜——それを思ひ起すことさへ既に私には一つの寂寥である——が相迫つて、そこに深い木立をなし、木立の蔭に纔に巖が現れて、苔のあるやうなないやうなその蔭を、微に音を立てながら流れてゐる水、

ふ思を溪

(97)

小さな流、それを思ひ出す毎に、私は自分の心も共に痛々しく
鳴り出すのを感じないではゐられぬ。

溪のことを書かうとして心を澄ましてゐると、さまざまの記
憶がさまざまの背景を負うて浮んで来る。福島驛を離れた



若山 水牧

汽車が岩代から羽前へ越えようとし
て、大きな峠へかゝる。そこは板谷峠
といったかと思ふ。機關車のうめき
が次第に烈しくなつて、前部の車室と

後部の車室との乗客が、殆ど正面に向き合ふぐらゐる曲り曲つ
て列車の進む頃、深く切れ込んだ峽の底に、車窓の左手に白々
として一つの溪が流れてゐるのを見た。汽車は既に餘程の
高所を走つてゐるらしく、その白い瀬は草木の茂つた山腹を

峽
兩方から山が
さし迫つてそ
の間に谷のあ
るところ

越えて、遂に下に瞰下された。私がそこを通つた時、斜に白い

脚を見せて、驟雨がその峽にかゝつてゐた。

汽車から見た溪が次々と思ひ出される。越後から信濃へ越
えようとする時に見た溪、その日は雨近い風が山腹を吹き靡
けて、深い茂みの葛の葉が亂れに亂れてゐた。肥後から大隅
の國境へかゝらうとした時、その時は冬の最中で、枯木立の疎
らな傾斜の蔭に、氷つたやうに流れてゐた。それは大きな岩
の多い溪であつたと思ふ。

たけながく引きてしらく、降る雨の峽の片山に

汽車はかゝれり。

いづ方へ流るゝ瀬々かしらくと見えゐて遠き

峽のほそ溪。

秋のよく晴れた日であつた。或用事を抱へて、私は朝早くから街の方へ出て行つた。しかし、訪ねる先の主人が留守であつた。その歸りに池袋停車場に廻つて、そこから出る武蔵野線の汽車に乗つた。廣々した野原に出て、思ふさまその日の日光を身に浴びたかつたからである。一度途中の驛に下りたが、そこらの野原を少し歩いてゐる内に、野末に近く見える低い山の姿を見ると、是非その麓まで行きたくなり、次の汽車を待つてその線路の終點驛飯能まで行つた。そこに着いた時はもう日暮で、引返すとなると、非常に遽しい氣持でその日の終列車に乗らねばならなかつた。それに、何といふことなく疲れてもゐたので、餘り氣持のよくない乾ききつたやうな

宿場町のそこに、たうとう泊つてしまつた。運悪くその宿屋に繭買とも見える下品な商人等が泊り合せてゐたので、折角いゝ氣持で出かけて來た靜かな心を散々に荒されてしまつた。不愉快な氣持で翌朝はやく起きて、朝飯前に散歩に出た。漸く人の起きて出た町を、その外れまで歩いて行つて、私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。飯能といふと、野原の果の低い丘の蔭にある宿場だとはかり考へてゐたので、さうした見事な溪が流れてゐようなどは夢にも思はなかつた。少からず驚いた私は、あわてながらその溪に沿うて少しばかり歩いて行つた。眞白な砂洗はれた巖、その間を澄み徹つた水が淺く深く流れてゐる。昨夜來の不快も悉く忘れ果て、急いで宿屋に歸つて朝飯をしまふなり、私はまたすぐ引返して、

原市場名栗
飯能から遠く
ない

すつかり落付いた心になり、その溪に沿ひながら山際の路を登つて行つた。溪を挟んだ山には黄葉も深く、諸處に植ゑつけた大きな杉の林もあつた。細長い筏を流す人達にも出逢つた。ゆる／＼と歩いてその日は原市場で泊り、翌日は名栗まで行つた。その翌日長い峠にかゝると共に、その溪はいよいよ細く、終には路とも別れてしまつた。そして、落葉の深い峠を越すと、そこにまた新しい溪が流れ出してゐた。

朝山の目を負ひたれば溪の音、冴えこもりつゝ、霧たちわたる。

おどろ／＼轟く音のなかにあて、眞向ひに見る
いはかげの瀧。

津輕平野
青森縣のうち

淺瀨石川といふのは、津輕平野を越えて日本海の十三瀨に注ぐ岩木川の支流の一つである。そこだけで鱒の上るのが止まるといふ荒い瀨の續く邊に、板留といふ小さな温泉場がある。温泉は川の右岸に當る斷崖の中腹に二個處と、その根がたの河原に接した處に一個處と、一二町づつの間隔を置いて湧いてゐる。私の好んで這入つたのはその斷崖の根がたの温泉で、入口には蕙が垂らしてあるばかり、板の壁は大方破れて、湯にゐながら溪の瀨が見られた。



川石瀨淺

或日の午後ぼんやりと獨りで浸つてゐると、次第に湯がぬるんで來た。氣がつくと板壁の根の方から溪の水が竊に流れ



やうどその對岸の木立の中に——そのあたりにも水が流

板 たりから急に雪が解けはじめたら
留 しく、溪水の濁つて來るのは分つて
温 ゐたが、かう急に水嵩が増さうとは
泉 思はなかつた。呆氣あうけに取られて、裸
體のまゝ、小屋の外に出て見ると、赤
黒く濁つた水が、ほんの僅かの間に
全く河原を浸して流れてゐた。ち

れ及んでゐた——網を提げた男が一人あちこちと歩いてゐる。雪解を待つて鱒は上つて來るといふことを聞いてゐたが、その男は今それを狙つてゐるのらしい。やがてまた一人の男が現れた。雪が解け出したとはいへ、四邊の山は勿論、ついその川岸から絶頂までまだ眞白に積み渡してゐる。その雪と濁つた激しい溪と、珍しく青めいたその日の日光との中に、黙々として動いてゐるこの鱒捕りの人達がいかに寂しいものに私の眼には映つた。遙かな溪を思ふ毎に、私の心にはいつもそれらの寂しい人達の影が浮んで來る。

雪解水岸にあふれてすすかすむ淺瀬石川の
鱒捕りの群。

むら山の峽より見ゆるしら雪の岩木が峯に

霞たなびく。

三浦半島
神奈川縣のう
ち

三浦半島の寂しい漁村に、二年ほど移り住んでゐたことがあつた。小さな半島に相應した丘陵の間々に、小さな溪が流れてゐた。一哩も流れて來れば、すぐ汐のさしひきする川口となるといふやうな溪であつた。それでも、私はその溪と親しむことを喜んだ。川に棲むとも海に棲むともつかぬやうな小さな魚を釣ることも出來た。

わが心寂しき時しいつはなく、出でて見に來る

うづみ葉の溪。

冬晴の芝山を越えそのかげに、魚釣ると來れば

落葉散り堰けり。

水上へくと急ぐ心、我とわが寂しさを噛みしめるやうな心に引かれて、私はあの利根川のずつと上流わづか一足で飛び渡ることの出來るやうに細まつた處まで分け上つたことがある。狭い兩岸には、もう仄白く雪が來てゐた。斷崖の蔭の落葉を敷いて、ちよろくと、ちよろくと流れて行くその氷のやうに滑かな水を見、斑な新しい雪を眺めた時、何ともいへぬ心に私は身じろきさへ出來なかつたことを覺えてゐる。今思ひ出しても、神の前に跪くやうな有難い尊い心になる。水の幻、溪の俤、それは實に私の心が正しくある時、靜に澄んだ時、必ず心の底に現れて、私に孤獨と寂寥との喜びを與へてくれるのである。(靜かなる旅をゆきつゝ)

千家元麿
東京の人、詩
人、明治二十
一年生

三 鯉 よ

千家元麿

さま／＼な溪の面白さを並べてゐるといふばかりではなく、溪によつていかに作者が心から楽しみ悦んだかを、頗る簡単に、しかも要領よく述べてあるのがこの文章のすぐれた點である。それにすべて見方が念入りで、挿入した歌も少からず趣を添へてゐる。そして、同時にまた、何とはなしに人に考へさせ省みさせる力さへも籠つてゐる。

静かな夕暮、大きな古池に、
深い水底から浮びあがつて來て、
悠々と泳いでゐる鯉よ。
おまへたちは水も動かさず

古びた大きな樹の映つた影や藻の中を、
あつちにもこつちにも
身をうねらしてゐる。

大きな鯉よ。
おまへたちの姿は實に不思議だ。
實に美しい。

おまへたちはもうこの池に随分ながく棲んでゐるのだ
らう。
誰もおまへたちを捕らうとするものはなく、
おまへたちはいつまでもさうして、
心安らかに平和に泳いでゐられるのだ。

おれはおまへたちの平和な姿を見るのが好きだ。
時々来ておれはおまへたちの姿を見たい。
今の世におまへたちのやうな
美しい健全なものがあるかと思ふと、
おれは心の底から嬉しい。

鯉よ。

おれはおまへたちに見習つてもいゝと思ふ。

悠々自適の化身のやうな、

平和の姿の化身のやうな、

優長な堅實な鯉よ。(改造)

「鯉よ」といふ呼びかけがこの詩を生氣づけてゐる。作者はおまへたちといふ語をとほして、飽くまで元氣な鯉を全く自分の友人たる地位にまで引上げてやつてゐる。かうして、無心の動物に見出された落付いた心持や平和の喜びが玉のやうに光つてゐる。それは全くこの詩の有する餘徳である。

甲山翁集

四 平泉の廢都

三代
清衡・基衡・秀衡
上方
京都をいふ
平泉
岩手縣

藤原氏三代の榮華の時には、あらゆる上方のものが平泉に移された。城廓もかなりに廣く、鎌倉覇府の址と比べて見ても、決して劣りはしなかつた。立派な人々も上方から大勢やつて來た。北上川の對岸に今もある東稻山に櫻を植ゑて、そこを嵐山の勝になぞらへ、そして、北上川を櫻川と呼ばせた。今、平泉沿革圖を見ると、殊にはつきりとその時代の有様が思

浸蝕
水がしみこん
で次第にそこ
なはれる

ひやられる。北上川は昔はもつと東を、つまり東稻山のすぐ裾を流れてゐた。従つて現に川の流れてゐるあたり、または停車場のあるあたりがその昔の覇府の地であつた。高館の坂の近傍は今は北上川の流に年々浸蝕されて、赤い絶壁が段崩れて行つてゐるけれども、それは昔は覇府の西北の隅に當つて、小高い細長い丘陵をなしてゐた。そして、中尊寺・毛越寺などは、京都・奈良の寺々と同じやうに、やはりその郊外に置かれたのであつた。

平泉の停車場を出て、寂しい村落を向ふに抜けて行く間は、従つて皆昔の覇府の建物のあつた處である。柳の御所、伽羅の御所、國衡屋敷など、さうしたものが皆こゝにあつた。やはり鎌倉と同じやうに、その址は礎も何も残つてゐず、全く荒廢し

平泉の御所々々



(1) 金色堂全景

(2) 衣川を望む

(3) 毛越寺址

(4) 中尊寺遺上

て大方田畑になつてゐるけれども、案内者が、あれは金雞山といつて、この都の鎮めのために、秀衡が黄金の雞を埋めたといはれる山です。などと、小さな尖つた山を指さすのを見ると、さすがに昔の氣分にならずにはゐられなかつた。義經が年若

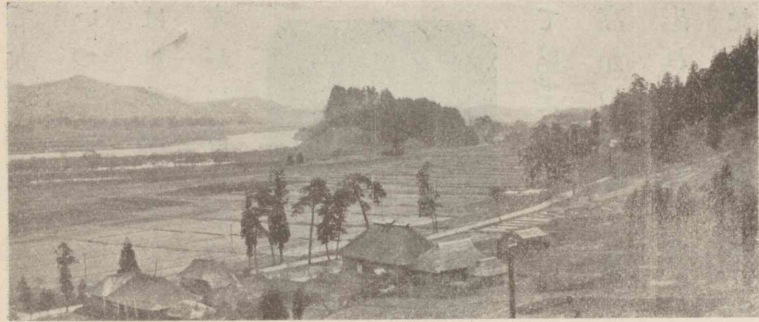


田山花袋

て見えた。

高館の丘陵を前にしたあの松竝木の中の感じは、殊に私には忘れかねた。田畑を取巻いて丘陵の錯雑した形が好い。また數町の處に北上の大河を豫想した形が好い。その松竝木

くてこゝにかくまはれてゐた形や、最後に再びまたこゝに戻つて來た様など、目のあたりそれを見でもするかのやうに、あり／＼と私の胸に描かれ



高館と北上川

の中を貫いて、汽車のレイルの走つてゐる形が好い。そこには高館に這入つて行くところに、それを標示した木標が立つてゐて、旅客は迷はずに行くことが出来るやうにしてあつた。

高館の址は半ば雑草に埋れて、判官堂がたゞ一つ寂しく立つてゐるばかりであつた。登り口の石段のでこぼこに壊れてゐるのも悲しかった。

中尊寺毛越寺などが覇府の址から見ると、郊外にあつて、そして、中には寂然として昔ながらの建物を残してゐるものもある

のが私の心を惹いた。今では、旅客は平泉といふとすぐ中尊寺や毛越寺へと出掛けて行く。そして、その残つたものばかりを珍しさうに見る。しかも、そのなくなつた址を見ようと思はない。それは残つた址も大切である。しかし、それ以上に、私は亡びた址に心を惹かれるのであつた。



中尊寺本堂

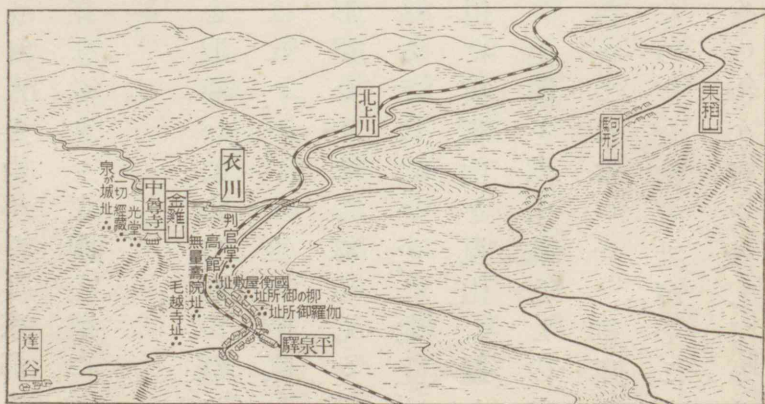
中尊寺では、例の金色堂が深く私の心を惹いた。そこに三代の棺が納めてあるのを思ふと、一層さういふ氣がした。また、當時の美術工藝の趣を知ることが出来ると思ふと、一層さう

芭蕉
松尾氏、江戸
時代中期の俳
人

いふ氣がした。小さな堂ではあるけれども、奈良の諸寺と共に、日本では最も珍としなければならぬものである。芭蕉などの行つた時分には、まだあたりがさう大して開けず、寺なども荒廢してゐて、寶物も十分に見ることが出来なかつたであらうが、今日では平泉の状態はかなりに世に知られてゐる。私は清衡が建てた中尊寺、基衡が建てた毛越寺、またその子の秀衡が建てた無量壽院などの山に凭り谷に枕した様子を頭に浮べると、一つの大きな古代の幻影がそのまゝ、そこにはつきりと出て來るのを感じずにはゐられない。廢都——日本で完全にさうした趣の味は、られるのは、奈良を外にしては、第一に指をこゝに屈しなければならぬ。高館の丘の崖が北上川の水勢のために年々崩れて、その時分

飛鳥
允恭天皇はじ
め七代の皇居
のあつた地

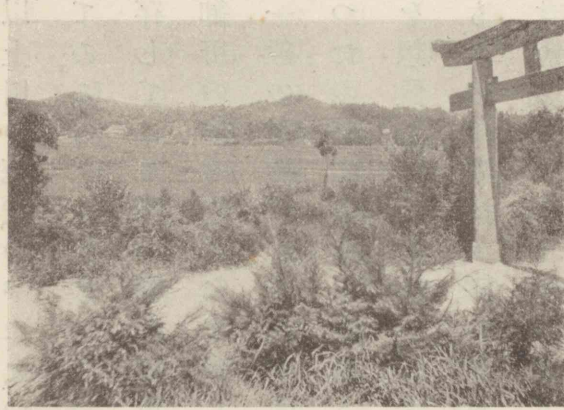
その中心地區であつた市街が半分以上川の流域の中になつてしまつてゐることを想像した。また今日存してゐる柳の御所の址や伽羅の御所の址の位置などから推しても、一般の市街がその東南の地區であつたのがはつきり指點されることを想像した。それから考へて見ても、この平泉は大和の飛鳥の都などよりも、もつとぐつと大きかつたことを想像することが出來た。小さな奈良といふよりも、あの藤原時代



の繁華をそのまゝこゝに移したやうな東奥の小さな京都さういつたゞけでも、その時代の幻影がはつきりと眼の前に浮

んで来る。

あたりを取巻いた山の形が既にさうではないか。土地の咽喉を扼した形がいかにも城らしい感じを與へるではないか。北上川を大堰川に、東稻山を嵐山に擬して、そこに山櫻を澤山栽ゑたのなども面白いではないか。御所といふ名をつけた館の址がここに



金 雞 山

こに残つてゐて、その周圍に更に大きく寺の址を残してゐる

大堰川・嵐山
共に京都の西
郊にある

のも、その都の規模の小さくなかつたことを語つてゐるではないか。秀衡が金雞山に漆一萬盃に黄金をまじへて埋藏し、それを子孫に傳へたといふ傳説も面白いではないか。またその時それを歌つた「朝日さし夕日輝く木の下に、漆萬盃こがね置く」といふ俗謡が今に残つてゐるのも懐かしいではないか。そして、その館の址を過ぎ、都の址を過ぎ、寺の址を過ぎて、最後に三代の主の棺の置いてある金色堂に突き當るといふのも、人生を語つてゐるではないか。またそのあたりに一切經藏だけが焼けずに残つてゐるといふのも、深く人をして考へさせるではないか。

明治二十八年、私が最初行つた時には、芭蕉などの頃と餘り變らぬらしい寂しさと荒廢した様とが残つてゐたやうであつ

運慶
鎌倉時代の佛
師

だが今では大きな保勝道路などといふのが出来て、中尊寺から毛越寺の方へ行く路など、わるく新しくなつてしまひ、毛越寺の芭蕉の句碑のあるあたりや、安倍宗任の女で基衡の室であつた人の墓のあるあたりなども、わるく俗になつてしまつたのは遺憾である。

中尊寺では、それでも金色堂と一切經藏とが残つてゐるので、いくらか當時の有様を想ふことが出来るけれども、毛越寺の方には何一つ残存してゐない。運慶が作つた薬師佛——それが出来あがつた時、鳥羽法皇がそれを見て、洛外に出て東國に赴くのを惜しませられたといふ薬師佛などが残つてゐたなら、それこそどんなに私達の心を惹くことであらう。しかし、さういふものは今は殆どなくなつて、たゞ大阿彌陀堂とい

ふ二間四方ばかりの茅葺の小堂のうちに、塵埃にまみれた阿彌陀佛の坐像だけが残つてゐた。私はそれを見て一層殘念な氣がした。(古人の遊蹟)

景色を見て昔を思ひ出しながら、平泉の驛からとぼくと田舎路を辿つた旅人としての作者の姿がありくと目に見えるやうな書きぶりである。しかも、細かくいへば、そのうちに洗へられてゐる感想の飽くまでもしんみりとして物なつかしいのが特に目につく。

本山荻舟

名は仲造、岡山縣の人、文學者、明治十四年生

一五 塙保己一

本山荻舟

中仙道^{なかせんどう}を江戸に向つて、とぼくと辿る少年があつた。後から追付いた若い旅商人が聲をかけた。

「おい、お前は目が不自由なんだな。何處へ行きなさん。」

「はい、江戸へまゐるので御座ります。」
「たつた一人でかい。見ればそんな荷物など背負つて、さぞ難儀なことであらう。おれも江戸へ行くのだから、幸ひ道づれになつてやらう。」

「有難う御座ります。あなた様はやはり江戸のお方で。」

「いや、おれは秩父の絹商人で、商用のため行くのだが、お前の郷里は何處だ。」

「はい、兒玉在の保木野村で御座ります。」

「では、同じく武州の生れだな。江戸へは何しに行きなさる。」
「學問を修行して、出世の道を求めにまゐります。」

「それは感心なことだ。しかし、盲人の修行といへば、琴・三味線か按摩鍼と大抵相場の極つたものだが、お前その不自由

な目で學問の修行が出来るか。」

「目は見えませぬが、心の眼はあいてをります。在所で聞いた話で御座りますが、江戸には太平記をそらで誦むとて、諸家様へお出入して立派に名を揚げてゐる盲人もあるとか



本 山 萩 舟

申します。太平記はたゞの四十卷、みんな覺えたところで知れたもの、それぐらゐのことで名が顯れ家が興るなら、それは別段むづかしいこ

とではないと存じます。」

「ほう、年に似合はぬえらいことをいふ子だ。一たい幾つか

らそんなになつて、今年は何つになりなさる。」
「盲めくらになつたのは五つの年で、今年十三で御座ります。」

「なるほど、目は見えなくても、心の眼があいてゐる。それに違ない。心掛さへすぐれてゐたら、たとひ身體は不具でも、立派に出世は出来る筈だ。四肢五體が満足に揃つてゐながら、一生を犬の道中のやうに、たゞ食つて通るだけでは恥かしい。おい、小僧さん、お前はおれに取つては、心の眼をあけてくれた大先生とも善智識とも思ふよ。」

「へ、何を仰せられます。」

「いや、ほんたうのことだ。おれも實はな、疾うから考へてはゐたんだが、いつまでこんな旅商人をするつもりはなかつた。そこへお前の話を聞いたので、すつかり心の眼が覺めた。この上は、江戸へ出たら、きつとやがて名を揚げて見せるぞ。」

「それは結構で御座ります。あなた様の出世を、蔭ながら祈つてをります。」

「それよりも、どうだらう、おれは今年二十二で、お前より九つも年長だが、思ひ立つたのは同じく今日だ。どつちが早く名を揚げるか、一番出世競べをして見ようではないか。」

「それも面白う御座りませう。決して負けはしませぬ。」

「は、これもお互に勵みの一つだ。時にお前の名は？」

「辰之助と申します。」

「さうか、おれは助三郎といふものだ。またいつか邂逅ふこともあらう。」

「それまでは、どうぞ身體を達者にお暮しなされませ。江戸に入ると同時に、二人は右と左へ別れた。」

麴町の東條源右衛門のところへ着いた辰之助は、道中で高言を吐いた割合には、感の悪い盲人だった。

遠い先祖は参議小野篁だといふものゝ、辰之助の物心ついた頃には、家寶として傳來した太刀までも人手に渡さねばならぬやうな有様だった。それに、十二歳で母を失つてからの辰之助は、子供心にも健氣な志を立て、翌年の秋出府する決心をしたのだつた。

當時の習として、盲人として立身するのには、然るべき檢校に頼つて、修行を積まねばならなかつた。辰之助も源右衛門の口添で、四谷にゐた雨富須賀一の内弟子となり、名さへ千彌と改めた。

千彌はまづ音曲や按摩の稽古をしたが、手先の技はどちらも無器用で、一向腕が冴えなかつた。おまけに感が悪いと來てゐるので、何處へ療治に聘せられても、大方一度で愛想をつかされたが、ひとり學問のことになると、一を聞いて十を悟り、讀み聞かされた書籍は諳記して忘れなかつたので、不思議な小按摩としてかはいがられた。

或時、師匠の出入をする緣故で、番町にある大名屋敷に招かれて、食事を饗せられたが、膳に向つても千彌は至つて不行儀で、給仕のものに眉をひそめさせた。その歸りに、進まぬ足を引摺つて大儀さうに流して歩いて行くとき、おい、千彌さんと呼びとめられた。

「へい、療治で御座りますか。」

「あ、ちよつと聞きたいことがあるんだ。むづかしい字なんだ。かうやつて、大勢ゐるけれども、誰一人分るものがない。弱つてゐるんだ。お前は、大層物識だといふから、知つてゐるなら聞きたいと思つて。」

「冗談おつしやつちやいけません。番頭さんはじめ、お店の方々大勢で讀めないほどの文字が、どうして私に分りませうか。」

「いや、さうでない。お前は中々の學者だといふことだから、きつと知つてゐるに違ない。」

「一たいどんな文字で御座りますな。」

「實は所書とくせんなんだが、せんずに義の字が書いて、下に町とあるんだ。」

江戸の町名も澤山あるが、こんなのはついぞ見たことがない。何と讀むだらうな。

千彌は暫く考へてゐたが、思はず噴飯ふんぱんしてしまつた。

「それなら分りましたよ、油町ですよ。」

「ふうん、それは不思議だな。違ないか。」

「きつと違ありません。」

試に小僧を走らせて見ると、果して尋ねる家は油町にあつた。

「千彌さん、お前どうしてそれが分つたね」と、店のものはいづれも怪訝けげんの眼を見張つた。

「なあに、それは書いた人が油といふ文字を知らなかつたんですよ。教へた人がせんずに由といつたのを、同じ訓の義と間

違へたんでせうよ。

「なるほど」とはじめて會得したが、それにしても頭のよいの
に一同は舌を捲いた。そんなことで、また得意が殖えた。

衆分
もと僧侶の階
級の一、後に
盲人にも用ひ
た

雨富に入門した明年、萩原宗固について和歌と國文を學ぶ一
方、川島貴林に従つて漢籍と神道とを修めた。そして、師匠の
檢校に許されて、専ら讀書に努め、遂に十八歳でいよ／＼望み
どほり一座の衆分しゅうぶんに列し、名を保木野一と呼ぶやうになつた。
これは異數な成績として、一世の歎稱を博した。

雨富檢校は常陸國の人、本姓は埴であつた。弟子の保木野一
が次第に名聲を高めて來たのを見て、もはや勾當に進むべき

安永四年
(1793)

時になつたことを感じた。即ち安永四年正月元日を以て、師
姓を冒して埴勾當と稱し、名も保己一といふやうになつた。



一己保埴

それは麴町の平河天神に千日の立願
をしてから、その第九百日に當つた日
のことであつたが、保己一は師恩と神
慮の畏さとに感激して、ますます信仰
を固くすると共に、身を慎んで學業に
いそしんだ。

その後、四番町に住んで、塾を濫故堂と名づけた。保己一の評
判は漸く高く、風を望んで來り學ぶものが門前に市をなすに
至つた。「番町で目あき盲に道を聞き」といふ川柳が世にはや

寛政十年

(三五)

根岸肥前守
名は鐵衛

されたのは、實にこの頃のことであつた。
江戸へ出た時の道づれの絹商人は公儀に仕へて追々に出世し、寛政十年には町奉行となり、在職十八年、近世の名奉行と稱せられた根岸肥前守であつた。保己一が國學の大家として朝野に重んぜられたことはいふまでもない。(名人畸人)

何の苦もなく書き流したやうであるが、しかし、對話の運びがまことに要領よく、分りやすい言葉を續けて行く間に、事がらの面白みが躍り出てゐる。文章の書きおこしが殊に人の注意を促すやうに、物語らしく出来てゐるのもよい。

久保田万太郎
東京の人、文學者、明治二十二年生

二 浮世床小景

(客・主人、將棋の仲間三四人)

客 それあさうだ。諸事さうなつたんだ。時のならはしつてものは不思議なものだ。

主人 こちとらの餓鬼の時分には、大三十日のあけがたにまだ扇子々と賣つて來て、その聲を聞くとわけもなく春めいた氣のしたもんだが、今ではそれもさつぱりなくなつた。客 さういへば、元日の朝、鯨賣だの福壽草賣だのが來て、いかにも元日らしい心持がしたつけが、この頃ではいつにも鯨賣の聲なんぞ聞いたことがない。

主人 それに、何事にも氣がはやくなつた。ちかいためしが納豆だ。こちとらは冬でなくては食はないものとおもつて

餓鬼
幼兒をいやしめていふ語

肝右衛門
式亭三馬の作
に出てゐる人

ゐたのに、このごろでは八月のはじめから納豆汁だ。で、肝心の霜月時分には納豆々々の聲もしない。いやになつちまふ。

客われ／＼にしてがさうだから、あの横町の肝右衛門さんな



久保田万太郎

んぞのいつもやかましくいひなさるのに無理はない。尤ものわけだ。主人全くそれは肝右衛門さんの臺詞ではないが、芝居の狂言でも以前は荒事が第一だつた。荒事師がふつと一吹き吹くと、二三十人のぺえ／＼、役者が揚幕の方へ吹き飛ばされる。舞臺一面の大島臺に役者が残らず乗り、段々それがせりあげになると、その大島臺を大太刀の柄のさきにつつかけ、握りつ拳

荒事
芝居で剛勇な
武ばつたわざ
をすること
揚幕
芝居で花道の
出入口にかけ
る幕

柏庭
江戸時代中期
の俳優、二代
目市川團十郎
のこと

を顎へ當てた奴が眼をむいてせり出す。柏庭の噂をしちやあよく爺さんがさういひ／＼したが、今どきそんなことをしたら誰も見るものはない。

客それに、つらねといふものが廢りきつた。

主人いくら長たらしい文句でも昔の見物は耳を澄まして聞いてゐた。それだけ見せる方も優長なら、見る方も優長だつた。敵役は藍隈か赤つ面、立役はちよいとだけ眼の縁へ紅をさす。だから出て來るとすぐ、あゝあれはどういふ役だと分つたが、今は敵役もおんなじやうに白く塗るから、どれが悪でどれが實か分らない。昔つからの見物はみんなさういつてゐる。

客進んだといへばそれだけ進んだわけだ。七十幾つにな

つらね

顔見世狂言の
時におもな役
者のいふ臺詞

敵役

芝居で悪人に
いでたつ役

立役

芝居で俠客に
いでたつ役

る爺さんが十四五の娘形になつたといふのは昔のことです。その頃の人はそれでよかつたものゝ、今の世の中はそれでは濟まない。狂言と地との差別が段々なくなつて來た。

主人だから、つまりは水も本水ほんみづを使へば、飯もほんたうに食ひ、芋もほんたうの芋を洗つて鍋へ入れ、ほんたうの火にかけて煮て見なければ納まらなくなつた。時の鐘だつて銅鑼を叩いたものが本釣になる。鐵砲



髮 結 床

事だ
大變だ

だつて今では竹筒へ煙硝をこめた本鐵砲といふ奴だ。この鹽梅で行つたら、このさき、どんなことになり行くか分らない。

客 しかし、さうなつたら事だ。

主人 事だとも、それは。

客 さうなつたら變るだらうなあ、世の中も。

主人 それこそらんび亂國だ。二二が四、二三が六と、物事がそれこそちやうどつこには行かなくなる。

客 (しみぐと) さうだらうなあ。

この時將棋の仲間に爭論起る。(夜鴉)

簡単な對話のうち、主客の心持や世間の様子がはつきりと出てゐる。芝居のことが多く見えるのは、昔の社會がそんなことに非常に興味を

持つてゐたしるしである。ぞんざいな言葉づかひもよくその人々の
人がらを示してゐる。

三 叡 山

夏目漱石

夏目漱石
名は金之助、
東京の人、文
學者、大正五
年歿、年五十

「随分遠いね。元來何處から登るのだ。」

と、一人がハンケチで額を拭きながら立ち止まつた。

「何處かおれにもはつきりせんがね。何處から登つたつて

同じことだ。山はあそこに見えてゐるんだから。」

と、顔も體も四角に出來あがつた男が無造作に答へた。

そりを打つた中折の茶の廂の下から、深い眉を動かしながら

見上げる頭の上には、微かな春の空の底までも藍を漂はせて、

吹けば揺ぐかと怪しまれるほど柔かい中に、屹然としてどう

叡山
京都の東北方
にある

する氣かといはぬばかりに叡山が聳えてゐる。

「恐ろしい頑固な山だなあ。」

と、四角な胸を突きだして、ちよつと櫻の杖に身をもたせてゐ

たが、

「あんなに見えるんだからわけはない。」

と、今度は叡山を輕蔑したやうなことをいふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つた時から見

えてゐる。京都へ來て、叡山が見えなくなつては大變だ。」

「だから、見えるからいゝではないか。よけいなことをい

ずに、歩いてゐれば自然と山の上へ出るさ。」

細長い男は返事もせず、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで

ゐる。日頃からなる廂に遮られて、菜の花を染め出す春の強

輕蔑
さげしむ、か
ろんずる

い日を受けぬ額だけ、目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちやあ大變だ。さあ早く行かう。」

相手は汗ばんだ額を思ふまゝ、春風に曝して、粘りついた黒髪
の逆に飛ばぬのを恨むやうに、ハンケチを片手に握つて、額と

もいはず顔ともいはず、頸窩けいごの盡きる

あたりまで無茶に搔き廻した。促さ

れたことには頓着する氣色もなく、

「君はあの山を頑固だといつたね。」



石 漱 目 夏

と聞く。

「うむ、動かばこそといつたやうな按排ではないか、かういふ
風に。」

と、四角な肩をいとゞ四角にして、すいた方の手に榮螺ささの親類

を作りながら、聊かわれも動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそといふのは、動けるのに動かない時のことをい

ふのだらう。」

と、細長い眼の角から斜に相手を見おろした。

「さうさ。」

「あの山は動けるかい。」

「あはゝゝ、またはじまつた。君はよけいなことをいひに生
れて來た男だ。さあ行くぜ。」

と、太い櫻のステッキを、ひゆうと鳴らさぬばかりに、肩の上ま

で上げるや否や歩き出した。瘠せた男もハンカチを袂に收

めて歩き出した。

「今日は山端の平八茶屋で一日遊んだ方がよかつた。今か

山端
京都から大原
へ行く途中に
ある

ら登つたつて中途半端はんぱになるばかりだ。元來頂上まで何里あるのかい。」

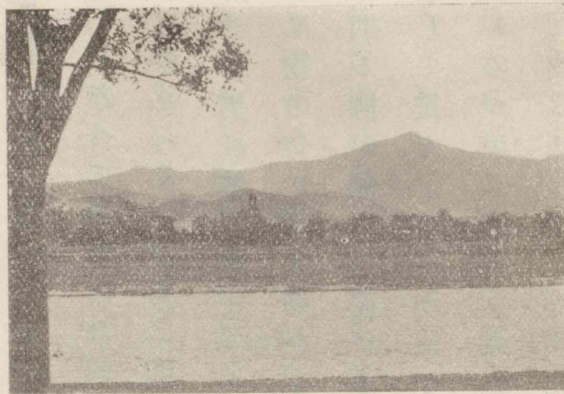
「頂上まで一里半だ。」

「何處から。」

「何處からか分るものか。高の知れた京都の山だ。」

瘖せた男は何もいはずににや／＼と笑つた。四角な男は威勢よくしやべり續ける。

「君のやうに計畫ばかりして一向實行しない男と旅行すると、何處もかしこも見損つてしまふ。連れこそいゝ迷惑だ。」
「君のやうに無茶に飛び出されても相手は迷惑だ。第一、人を連れ出して置きながら、何處から登つて何處を見て何處へおりののか見當がつかんではないか。」



山 叢 比

「なんの、これしきのことには計畫も何もいつたものか。たか

があの山ではないか。」

「あの山でもいゝが、あの山は高さ何千尺だか知つてゐるかい。」

「知つてゐるものかね、そんなく

だらんことを。君、知つてゐるの

か。」

「僕も知らんがね。」

「それ見るがいゝ。」

「何もそんなに威張らなくてもいい。君だつて知らんのだから。山の高さはお互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かゝるぐらゐは

物の句に云々

何でもすべて
が俳句によま
れさうな趣の
ある京都

高野川

大原の翠黛山
から出て、南
に流れて鴨川
に入る

潺湲

さら／＼と水
の流れるのに
いふ

多少確めて來なくつては、豫定通りに日程は進行するものではない。」

「進行しなければやり直すだけだ。君のやうによけいなことを考へてる中には、何遍でもやり直しが出来るよ。」

となほさつさと行く。

瘖せた男は無言のまゝ、あとに後れてしまふ。

春は物の句になり易い京の町を、七條から一條まで横に貫いて、畑の柳の間から、濇い水打つ白い布を高野川の河原に數へ盡して、長々と北にうねる路を大方は二里あまりも來ると、山はおのづから左右に逼つて、脚下に奔る潺湲の響も、折れるほどに曲るほどに、あるは此方あるは彼方と鳴る。山に入つて春は更けたのに、山を極めたら春はまだ殘る雪に寒からうと、

見上げる峯の裾を縫つて、暗い蔭に走る一條の路に、爪先上りの向ふから大原女が來る、牛が來る。京の春は牛の尿の盡きぬほどに長く靜かである。

「おうい。」

後れた男は立ち止まりながら先の友を呼んだ。

「おうい。」といふ呼聲が白くひかる路を春風に送られながらのそりかんと行き盡し、萱ばかりの突き當りの山にぶつかつた時、一町先に動いてゐた四角な影ははたと止まつた。瘖せた男は長い手を肩よりたかく伸ばして、返れ／＼と二度ほど振つて見せる。櫻の杖が暖い日を受けて、またぴかりと肩の先に光つたと思ふ間もなく、彼は歸つて來た。

「なんだい。」

「なんだいではない、こゝから登るんだ。」
「こんな處から登るのか。少し妙だぜ、こんな丸木橋を渡るのは妙だぜ。」

「君見たやうに無暗

に歩いてゐると、若狭國へ出てしまふよ。」

「若狭へ出ても構はんが、一體君は地理を心得てゐるのか。」

「今大原女に聞いて見た。この橋を渡つてあの細い道に向

ふへ一里上ると出るさうだ。」

「出るとは何處へ出るのだい。」

「叡山の上へさ。」

「叡山の上の何處へ出るだらう。」

「それは知らない。登つて見なければ分らない。」

「はゝゝ、君のやうな計畫好きでも、そこまでは聞かなかつ

たと見えるね。千慮の一失か。それでは仰に従つて渡る

とするかな。君、いよく登りだぜ。どうだ、歩けるか。」

「歩けないたつて仕方がない。」

「なるほど哲學者だけあらあ。それでもう少しすると一人

前だかな。」

「何でもいゝから先へ行くがいゝ。」

「後からついて来るがいゝ。」

「いゝから行くがいゝ。」



大原女

一縷
ひとすぢ

「ついで来る氣なら行くさ。」
溪川に危く渡した一本橋を前後して横切つた二人の影は、草
山の草の繁つた中を、辛うじて一縷の細い力に頂へ抜ける小
徑の中に隠れた。草は固より去年の霜を持越したまゝ、立枯
れの姿である
が、薄く解けた
雪を透して、眞
上からさし込
む日影に蒸返
されて、兩頬が
ほてるばかり
に暖い。



山 叡

(148)

山 叡

「おい君、甲野さん。」
と振返る。甲野さんは細い山道に適當した細い體を眞直に
立てたまゝ、下を向いて、

「うん。」

と答へた。

「そろ／＼降参したかな。弱い男だ。あの下を見給へ。」
と、例の櫻のステッキを左から右へかけて一振りに振廻す。
振廻したステッキの先の盡きる遙か向ふには、白銀の一筋に
眼を射る高野川を閃かして、左右は燃え崩れるまでに濃く咲
いた菜の花をべつとりなすりつけた背景には、薄紫の遠山を
縹渺のあなたに描き出してゐる。

「なるほどいゝ景色だ。」

縹渺のあなた
ほんのりとか
すかに見える
あちら

山 叡

(149)

甲野さんは例の長身を振ぢ向けて、きはどく六十度の勾配に
ずり落ちもせず立ち止まつてゐる。

「いつの間にこんな高く登つたんだらう。早いものだな。」
と、宗近君がいふ。宗近君は四角な男の名である。

甲野さんは黒い頭を黄ばんだ草の間に押込んで、帽子も傘も
坂道に轉がしたまゝ、仰向に空を眺めてゐる。蒼く面高に削
り成した彼の顔と、無邊際に浮出す薄い雲の消えて入る大き
な天上界との間には、一塵の眼を遮るものもない。大空に向
ふ彼の眼中には、地を離れ古今の世を離れて萬里の天がある
だけである。

宗近君は羽織を脱いで袖疊みにし、ちよつと肩の上へ載せた
が、また思ひ直して、今度は胸の中から両手をむずと出して、う

千羊の皮は一
狐の腋に如か
す
史記に出てゐ
る語

んといふ間にもろ肌を脱いだ。下からちやん／＼が現れる。
ちやん／＼の裏からもちやん／＼とした狐の皮がはみ出して
ゐる。これは支那にゐる友人の贈物として、君が大事のちや
んちやんである。「千羊の皮は一狐の腋に如かず」といつて、君
はいつでもこのちやん／＼を一着してゐる。その癖、裏に着
けた狐の皮は疎らにほうけて、むやみに脱落する所を以て見
ると、何でもよほど性の悪い野良狐に違ない。

宗近君は脱いだ兩袖をぐる／＼と腰へ巻きつけると共に、毛
脛にまつはる立縞の裾をぐいとはしよつて、同じく白縮緬の
周圍に疊み込む。さつき袖疊みにした羽織を櫻のステッキ
の先へ引掛けるが早いか、「一劔天下を行く」と遠慮のない聲を
出しながら、一步に盡きる岨路を飄然として左へ折れたきり、

白縮緬
兵兒帶を指す

見えなくなつた。

甲野さんは漸く身を起した。また歩かねばならぬ。見たくもない叡山を見て、入らぬ豆の數々に、役にも立たぬ登山痕跡こんざきを、二三日がほどは苦しい記念と残さねばならぬ。苦しい記念が必要なら、數へて白頭に至つても盡きぬほどある、裂いて髓に入つて消えぬほどある。徒に足の底に膨れあがる豆の十や二十と、切石の鋭い上に半ば掛けた編上の踵を見おろす途端、石はきり、と面を更へて、載せかけた足をすはといふ間に二尺ほど迂らした。甲野さんは、萬里の道を見ずと小聲に吟じながら、傘を力に艱路を登りつめると、急に折れた胸突坂が下から來る人を天に誘ふ風情で、帽に逼つてゐる。甲野さんはまびさしをあふつて、坂の下から眞一文字に坂の盡きる

頂を見上げた。坂の盡きた頂から、淡い中に限りのない春の色を漲らした果もない空を見上げた。甲野さんはこの時、只萬里の天を見る。と第二の句を同じく小聲に歌つた。草山に登りつめて、雑木の間を四五段あがると、急に肩から暗くなつて、踏む靴の底が濕つぽく思はれる。路は山の背を西から東へ渡して、忽ちの中に草を失すると、すぐ森に移つたのである。近江の空を深く彩るこの森の動かねば、その上の幹とその上の枝が幾重幾里に連なつて、昔ながらの翠を年毎に黒く疊むと見える。二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の惡僧を埋めて、なほ餘りある葉裏に尊い佛達を埋め盡して、森々と半空に聳えてゐるのは傳教大師以來の杉である。甲野さんはたゞ一人この杉の下を通る。右から左から行く人を兩手

傳教大師
平安朝時代初
期の名僧、名
は最澄、比叡
山延暦寺の開
山

に遮る杉の根は、土を穿ち石を裂いて深く地盤に喰ひ入るばかりか、餘る力に撥ね返して、暗い道を二寸の高さに段々と横ぎつてゐる。登らうとする岩の梯子に、自然の枕木を敷いて、踏み心地のよい幾級の階を、山靈の賜と甲野さんは息を切らして登つて行く。

行く路の坂に逼つて、暗い處から洩れるやうに這ひ出づるひかげかづらの足にまつはるほどに繁いのを越すと、引かれた蔓の長いのを傳はつて、手も届かぬのに朽ちかゝる齒朶が風のない晝をふらくと動く。

「こゝだ〜」

と、宗近君が急に頭の上で天狗のやうな聲を出す。朽草の土となるまで積み古した上を踏めば、深靴を隠すほどに踏みこ

たへもないのに、甲野さんは漸くの思で蝙蝠傘を力に天狗の座まで登つて行く。

「善哉々々、われ汝を待つことこゝに久しだ。全體何をぐづぐづしてゐたのだ。」

甲野さんはたゞ「あゝ」といつたばかりで、いきなり蝙蝠傘を放り出すと、その上へどさりと尻餅をついた。見るともなく見れば、天を封ずる老幹の亭々と行儀よく竝ぶ隙間に、てきれき的皦と近江の湖が光つた。

「なるほど。」

と、甲野さんは眸を凝らす。

鏡を展べたとばかりでは飽き足らぬ。琵琶の銘ある鏡の明かなのを忌んで、叡山の天狗共が宵に盗んだ神酒の酔に乗じ

的皦
あざやかなの
にいふ

模糊と
ぼんやりと

て曇つた氣息を一面に吹きかけたやうに、光るもの、底に沈んだ上には、野と山にはびこるかげろふを、巨人の繪の具皿に集めて、たゞ一はけになすりつけた春色が十里の外に模糊とたなびいてゐる。

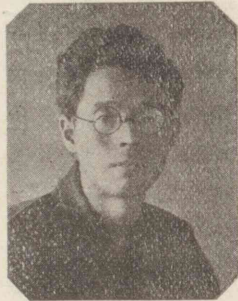
「なるほど。」

と、甲野さんはまた繰返した。(漱石全集)

奥深い古めかしい山の上に、氣安い二人の青年を出して思ふまゝに振舞はせたところに、この文章の面白みがある。あつさりと筋を運んで行く對話の次に、案外ないかめしい記事が出たり、小むづかしい描寫の揚句に、ぶつと吹出すやうなをかしさがあつたりする。いかにも達者な書きぶりである。

二本

百田宗治
大阪の人、詩
人、明治二十
六年生



百田宗治

本を愛したい、本を大切にしたい。子供の頃に本といふものに對して抱いてゐた感情——心持を以て、今も本に對したい。私は随分本といふものを粗末にして來た。はじめは大切にしてゐた本も、居移り處變るにつれて、いつ知らず人手に渡し錢に換へて、今になつては惜しまれるのも少くない。殊に友達の本をなくしたのは惜しい。惜しいといふよりも、その時の自分の心の淺はかなのが恨まれる。

私は小錢に窮するとよく本を賣つた。あれこれと、はじめは

百田宗治

なるべく自分に縁の少なさ、うなのをより抜いては風呂敷
づつみにしたが、次第に困つて來ると、惜しみながらも濫い友
情の籠つてゐるもの、かけがへのないものを袖にした。友達
をでも賣るやうで、さすがに手から手に渡す時は躊躇したが、
二度目にそこらを通つた折、それが埃の堆い店頭にさらされ
た書棚にならんでゐるのを見ると、思はずひやりとせずには
ゐられなかつた。

本を大切にしたいと思ふ心は、同時にこれまで自分の本をつ
くることになりにかなりぞんざいな心掛ですごして來たことを悔
いさせる。本を出す度に今度こそはと思ふのだが、性來の粗
放さはいつもその悔を繰返させる。

本の内容の立派さは、何處といふことなしにその外觀や手ざ
はりにもあらはれるものだ。書肆に任せきりでつくつた本
には、何處やら著者の冷たい心が感じられる。装幀が立派だ
といふことは、金をかけ、よいクロスClairを使ひ、金泥をつけるこ
とでは決してない。その人に即した本なら、どんな假綴のつ
つましいものでも、濫く受取れる。

本をつくるのに最も深く作者の良心の感じられるのは島崎
さんの本だ。「春や」家の装幀——何よりも著者の心づかひ、好
み、親切さのにじみ出たやうなところがある。また詩人で、そ
の本にさながらの詩感を最も色濃くにじませてゐるのは室
生犀星君だと思ふ。その「抒情小曲集」や「愛の詩集」などの自費
出版のものに、それが一層深く感じられる。

島崎さん
藤村をいふ

室生犀星
名は照道、石
川縣の人、文
學者、明治二
十二年生

本といふものに抱くいつくしみは、その本の體裁が個人的な色彩の濃厚なものであればあるほど好ましい。三十萬部も四十萬部も一時に刷るといふのを聞くだけでも、近頃の全集物にはちよつと手を出したくないやうな氣がする。反對に、それが思ひきつて多數であるだけに、ひそかにそのうちの手ずれた一冊を所有するといふことにも、何かつゝましい快さもある。

近頃は自費出版の本、別して詩集類が地方の人達からもよく出るが、餘りに安易に本をつくるといふことは考物ではないかと思ふ。自分に苦い經驗があるだけに、人のことでも一層氣になつて仕方がない。自分でつくる自分の本といふもの

には出来るだけ大事を取るべきではないかと思ふ。一度つくつた本はもうこはすことは出来ないのだ、人手に入ればどうすることも出来ないのだ、さう思ふと、恐ろしいやうな氣持さへする。

貧乏に貧乏を重ねたり、方々居所を轉じたりする間に、段々に本を失つて行く。讀みもしないものを子供だましのやうな本棚にならべて置く馬鹿らしさにも飽いたが、しかし、この頃になつて、一體本などといふものは、やはりそんな風に家のなかの何處か邪魔にならぬところに積んで置いて、ふいと何かのきつかけで讀みたくなつた時に捜しに行く、さういふものではないかと

も思ふやうになつた。ある時は、無用の長物のやうに取扱ひ、
なくなればなくなるで、またこんなことを考へる。

自分の著作を自分の部屋に飾つて置くのは妙に氣のひける
ものだ。殊に私のやうに、昨日書いたものを今日すぐ否定し
てゐるやうな側の人間にとつては、なほ更さうだ。だからと
いつて、自分の著作をその部屋の本棚に置ける人々のことを
私は悪くいふのではない。それどころか、私はいつもさうい
ふ人々の心持を羨しいとさへ思ふのだ。自分にも一冊ぐら
ゐるは自信の持てる、「これが私の著作です」といつて、人に示せる
やうな本を持ちたいと望んでゐる。(隨筆詩論集)

いはゞ爐邊の夜ばなしとも思へるやうに、打解けてさつぱりした調子
なのが嬉しい。本をつくる人にも、または本を取扱ふ人にも、數々の教
訓を與へる。本といふものに對して、今の多くの人々が持つてゐる輕
しい我儘な考を、この文章は残るところなく正してくれるに違ない。

志賀直哉

宮城縣の人、
文學者、明治
十六年生

元 百舌の子

志賀直哉

そろ／＼草の萌え出す頃で、柳堂は尻はしよりをして、一人庭
の草取をやつてゐた。ほか／＼と朝の日光を背中に受けな
がら、濡れた地面から立つ土の香を嗅いでゐると、いかにも心
の落付くのを覺えた。昨年は今頃病氣で、ひどく惱まされた。
今年はかうして草取などが出来る。それは想ふだけでも非
常に幸福なことに感じられた。

五六年前東京からこの沼べりへ引越して以來、彼は植込以外の庭の手入は殆ど植木屋の手を借りずにやつて來た。田舎は氣樂だつた。散歩などでいゝ樹を見つけると、簡単な交渉でそれを手に入れることが出來た。そして、植込んだ木が一年一年他の木と折合つて行くのを見ることに、彼には一つの樂しみとなつてゐた。

「先生、ちよつといらして御覽なさい。」

弟子の一人が庭口から呼んだ。彼は泥だらけの手をはたくと、腰をのしながらかちへ歩いて行つた。

「百舌と蛇とが喧嘩をしてゐるんです。」

「何處で。」

「物置の裏でやつてゐます。」

二人は臺所の前から湯殿を廻つて物置の裏へ行つた。熊笹の中でがさ／＼と音を立てながら、百舌が獨りで暴れてゐた。しかし、よく見ると、その首に小指ほどの太さの銀色をした小さな蛇が巻きついてゐた。蛇が頭を擧げると、百舌はその頭を激しく嘴で突いた。蛇はもう大分弱つてゐた。頭は既に碎かれてゐるが、それでも下から鎌首を擡げては百舌に食ひつかうとしてゐた。

「これは地もぐりといふ蛇だ。小さいがなか／＼氣の強い奴で、ステッキなどを出すと向ふ奴だよ。」

「兩方氣の強い奴だからいゝ勝負ですな。」

「もう蛇は駄目だよ。とつてやれよ。何か棒のやうなもので押へてからでないとおぶない。」

百舌は蛇と戦ひながら、人間の方にも用心してゐる。弟子が小さい竹の棒を持つて來ると、百舌は蛇を首へさげたまゝ、地面とすれ／＼に飛んで逃げた。そして隣との境の藪へ逃込まうとすると、小松の下枝に蛇の體が觸れ、百舌は突きのめる



志賀直哉

やうにそこへ落ちた。弟子はすぐ馳せて行つて、竹で蛇の體を押へた。百舌は口を開いて、かつ／＼といふやうな音をさせた。

「馬鹿」

彼はちよつと癩に觸つて、すいた方の手で百舌の頭を打つたが、百舌はすかさずその手を突いた。

「蛇よりは人間の方が強敵だからな。」

柳堂は立つて見てゐた。

「何かもう一つ竹を取つていたゞきます。」

柳堂はその邊を見廻したが、適當な竹がなかつた。そこで、生えた竹の枝を折つた。

「どうだ、これでいゝか。」

蛇は二巻き巻いて、一つ結んでゐた。竹の先でほごすのはなかなか厄介だつた。

「死にかけてゐながら、まだ締めてゐるんです。蛇といふ奴は全く執念深いな。」

「その蛇は植木に悪いことをする奴だから、離したら完全に殺してしまへよ。」

「百舌はどうしませう。」

囧
ほかの鳥を誘
ひ捕るために
つなぎとめて
おく鳥

「百舌なんか飼つたつて仕方がない。」

「囧をりになりますか。」

「生き餌だから面倒臭い。鵓はんで懲りた。」

蛇のからだだがほどけると、百舌は非常な敏捷さで逃げて行つた。

「お禮もいはずに逃げて行つたね。」

柳堂は笑つた。

柳堂は庭先に溢れてゐる井戸の水で手を洗ふと、離れの晝室に這入つた。彼は膠を火にかけながら、壁に立てかけた描きかけの枅張に眼をやつた。それは明日或晝の會の若い晝家が取りに来る筈の繪だつた。が、とても今日中には描きあげ

られさうもなかつた。

妹が庭下駄を鳴らしながら、茶道具を持つて來た。

「どうだ、これは……。」

柳堂は顎でちよつとその繪を指さしていつた。

「……………」

妹は茶道具を持つたまゝ、暫し立つてそれを見てゐた。

「餘り面白くないか。」

「さうでもありませんよ。しかし、どちらかといへば呑氣な

繪ね。……でも、いゝことよ。面白い所があつてよ。」

「今日中に描きあげられないと困るのだ。」

「會の方から取りにいらつしやるのは明日？」

「明日だ。」

潤筆料
書畫を書いた
について貰ふ
謝金

「潤筆料が貰へない繪だから、怠なまけてるなんて思はれるとい
けませんよ。」
妹は冷かした。

「馬鹿なことをいへ。これでも、この月描いたものではまし
な方だ。」

妹は柳堂が膠鍋をおろすのを待ち、火鉢の炭をついで歸つて
行つた。

きいーつ／＼といふ小鳥の強い啼聲が先刻から畫室の裏で
してゐた。柳堂は便所へ立つた序に、裏の窓をあけて見た。
裏は松山で、畫室はこの松山の一部を切崩して建てられたも
ので、その切崩した崖の途中には、實生の三年ほど経つた小松

が生えてゐる。きいーつ／＼といふ聲はその中でしてゐた。
間もなくその枝の一つが揺れ出すと、そこに雀ほどのいやに
まん圓い小鳥が現れて來た。嘴の具合も百舌の子らしかつ
た。小鳥は頻りにその邊を見廻しながら、きいーつ／＼と強
い聲で啼き立てゝゐる。先刻の百舌の子に違ないと柳堂は
思つた。蛇はこの子鳥を狙つたのかも知れない。

氣が氣でない不安さうな聲で母鳥を呼ぶ様子がいかにも可
憐だつた。長くなる筈の尾はまだあまり伸びてゐず、それ
も啼く度にびくり／＼動いてゐた。

柳堂は弟子を呼んで梯子を持つて來さして、自分でその小鳥
を捕へようとした。靜に手をやると、小鳥は少しも恐れなか
つたので、易々と掌中にすることが出來た。

前にカナリヤを飼つたことがあり、八角の大きな鳥籠があつたので、それに入れてやつた。

Canary-bird

「かはい、のね。」

「何だつて子供はみんなかはい、ものだよ。」

「いまにお前さんもいやに威張り散らして憎々しくなるのかね。」

「それあ仕方がない。その頃には逃がしてやるのだ。」

「それまで生きてゐるでせうか。」

「こいつは子供だから、すぐ餌につくだらう。あまり啼かなくなつたぢやあないか。」

「おとなしくしてゐますわ。人間でも傍にゐる方が頼りになるのかしら。」

「これあ鶉より面白いよ。」

「第一柄ですわ。お兄さんに馴れるなんて、百舌ぐらゐなものよ。」

柳堂は苦笑した。

「ひどいことをいふ。」

柳堂は興味を持つたものがあると、日に何度となくその前へ行つて、飽きるまでは時間つぶしをする悪い癖があつた。それを知つてゐる妹は、

「今日一日はお預りして置きますからね。」

といつて、それを持つて行かうとした。

「馬鹿。子供見たやうなことをいふな。仕事の合間々々に見て、氣をかへるんだ。」

「駄目ですよ。お兄さんのはこだはり出すといつまでもこ
だはつていらつしやるんだから。明日取りにいらして、繪
が出来てないと悪いことよ。」
餌は大丈夫つけて見せるといふことで、たうとう妹はそれを
何處かへ隠してしまつた。

百舌の子が早く見たいからといふ譯でもなかつたが、仕事は
珍しく捗つた。そして、夕方灯のつくまでには、どうかかうか
それを仕上げてしまつた。
柳堂はひどく上機嫌で、夜食の仕度の出来た茶の間へ這入つ
て來ると、

「おい、こゝへ百舌を持つて來い。」

こんな調子でいつた。

百舌の子は柳堂によく馴れた。籠は庭の枝にかけて置いた。
こちらから小さく切つた雞の肉を持つて柳堂が行くと、百舌
の子は遠くからそれを見付けて、全身の毛をふくらまし、小さ
な羽を震はして喜んだ。

「こら、馬鹿々々。」

尖らした箸の先にさした小さな肉を入れてやると、百舌の子
は少しもこはがらずにすぐ食べた。

柳堂は、

「百舌がこんなにかはいゝものだと思はなかつた。」
などといつたりした。

或日柳堂は東京へ行く用があつて、一日家をあけた。

そして翌日彼は寝すごし、床の中で眼を開くと、親百舌らしい強い啼聲が戶外でしてゐるのを聞いた。親百舌ならいゝが、他の百舌が狙ひに来てゐるのではないかしらと思つた。彼は寢間着に丹前を着て、まぶしい戶外へ出て行つた。

籠はいつものやうに榎の枝にさげてあつたが、どうしたことが、柳堂が近づくると百舌の子はひどく驚いて、籠の中でばたばた騒いだ。

「どうした〜」

彼はさういひながら引返して餌を取つて來た。櫻の高い枝で、親百舌がけたゝましく啼いてゐた。

百舌の子は彼のやらうとする雛の肉を食はなかつた。そして、一途に逃げようとして暴れた。

彼は大きな聲で妹を呼んだ。妹は手を拭きながら出て來た。

「昨日ちやんと餌をやつたか」

「え〜」

「をかしいぜ。何だかすつかり野生に還つてしまつてゐる」

「昨日から親鳥が來て、餌をつけ出したんです」

「それでだな。どうもをかしいと思つた、——あそこで啼いてゐる彼奴か」

「さうね。きつとあれでせう」

「人間といふ恐ろしい動物だから油斷をするなとでも教へたかな」

「ほんたうに。」

といつて、妹は笑つた。

「いゝ加減に逃がしてやる方がいゝわね。」

「自分が助けられたことも忘れて、怪しからん奴だ。」

「でも、自分の子供がこんな籠の中に入れられてゐるんですもの、心配なんでせう、昨日から始終この邊に来て啼いてゐるのよ。逃がしてやる方がよう御座んすよ。」

「いや、もう少しかうして飼つて、やる。」

百舌の子はそれからもずつと馴れなかつた。柳堂も諦めて、近頃は餌をやることさへやめてしまつた。親鳥は絶えず餌を運んでゐた。蜥蜴トカゲの胴たかきりの一本づゝ足のあるのなどが鳥籠の底にあつたりした。



「どうもこれがやり切れない。
だから、もう逃がしてやればい
いのよ。」

百 妹も眉を顰しかめていつた。
「仕方がない、逃がしてやらう。」

百舌の子の舌を放つて、親鳥が櫻の高い枝で頻りに啼いてゐる時だつた。柳堂は籠の口をあけてやつた。子鳥はいかにも覺束ない飛び方で、親鳥の方へ飛んで行つたが、笠のやうな老松の上まで来ると、その笠の中へ沈ん

でしまつた。櫻では、親鳥が夢中になつて啼き立てた。子鳥も啼きながら再び飛び立つたが、到底一度では親鳥の所まで行けなかつた。そして、無経験から自身の重みに堪へられないうやうな小枝の先に止まると、その度に落ちかけてひどく狼狽した。親鳥は子鳥が近づくと、啼きながら先へ行つた。また來るとまた先へ行きして、たうとう何處かへ連れて行つてしまつた。(山科の記憶)

事からはさう大して珍しくもないが、それを描く筆ぶりが並々のものではない。その畫家の生活畫家と弟子との關係、そんなことが百舌を中心にして、極めて手際よく寫されてゐる。終の方は殊に趣がある。

現代文學新選 卷二 終

□選新學文代現□

五・四卷	三・二・一卷	價 定
錢參四金各	錢四四金各	
錢壹七金各	錢參七金各	昭和四年 度定

昭和三年九月二十四日印刷・昭和三年九月二十七日發行
昭和四年一月十二日訂正再版印刷・昭和四年一月十五日訂正再版



著者 八 波 則 吉

發行者 東京市小石川區小日向水道町八十四番地 株式會社 東京開成館

代表者 松 本 繁 吉

印刷者 東京市小石川區西江戶川町二十一番地 佐々木 俊 一

發行所 東京市小石川區小日向水道町八十四番地 株式會社 東京開成館

【振替貯金口座】東京五三三三番

口取・文章雜談口

文	卷一・二・三	卷四・五
別	卷六・七・八	卷九・十
目	卷十一・十二	卷十三・十四

幾許池

山本堂印八十部

東京

東京開成館

國語

漢文

對

一

東京市小石川區小石川二十一番地



國語

漢文

對

一

東京市小石川區小石川二十一番地

東京市小石川區小石川二十一番地



竹籥



二六

籥

0
929
445

広島大学図書
200064445
